

長岡京市文化財調査報告書

第39冊

長岡京市文化財調査報告書

第39冊

1999

長岡京市教育委員会

編集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序 文

長岡市は「長岡京」として延暦3(784)年から10年間、都が置かれた歴史的にも重要な文化財包含の地であります。

当然それ以前にも数多くの古墳群が点在し、特に恵解山古墳からは多くの刀剣が出土して、国の史跡指定をいただき、整備買収に努めているところであります。

中世、近世についても、神社仏閣、城跡、街道など文化遺産は枚挙に暇がないといった現状であります。

長岡市としても厳しい財政状況ではありますが、これらの文化遺産を後世に残し語り継ぐべく、発掘調査等による資料の収集、保護と活用を歴史に培われてきた地域の特性を生かして進めてまいります。

ここに刊行します報告書は、国庫補助事業として平成10年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

長岡市の長法寺七ツ塚2号墳、今里回向場、東神足の神足神社南西部の発掘調査であります。

長法寺と今里では貴重な古墳周濠跡、東神足では中世の勝龍寺城の土壘と堀跡等が検出され、長岡市の歴史を研究する上で、これまでの調査と重ね合わすことにより明確で貴重な資料となるものと確信するものであります。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財團法人長岡市埋蔵文化財センターなど関係機関、また、発掘調査にご協力をいただきました土地所有者や近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成11年3月

長岡市教育委員会

教育長 小西誠一

凡 例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成10年度に国庫補助事業として実施した調査概要報告である。調査対象地は付表1のとおりで、その位置は第1図に示した。
2. 長岡京跡の調査次数は、左京城、右京城ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報(1977)』の旧字名をもとにした地区割りに従った。
3. 長岡京跡の条坊復原は、山中章「古代条坊制論」「考古学研究」第38巻第4号(1992年)の復原案に従った。
4. 本書に使用する地形分類については、とくに断らない限り「長岡京市域地形分類図」「長岡京市史資料編一」(1991年)に従った。
5. 長岡京跡の調査で使用している遺構番号は調査次数+遺構番号であるが、報告により調査次数を省略している場合がある。
6. 各調査報告の執筆者は各章のはじめに記した。
7. 本書の編集は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが行った。
8. 現地調査および本書の作成に至るまでの整理・製図作業には、下記の方々のご協力を得た。
また、遺物写真の撮影は写房楠華堂 内田真紀子氏のご協力を得た。

調査作業員

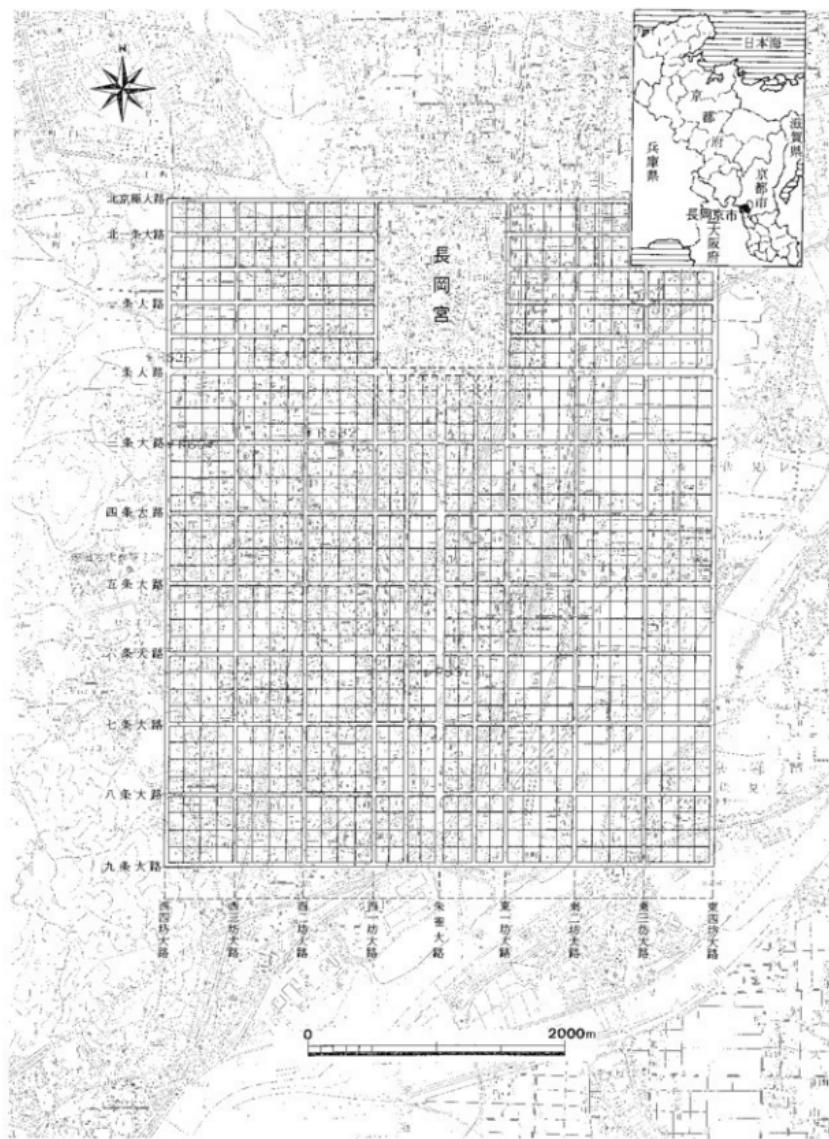
渋谷 進、高瀬嘉一郎、竹部 肇、堤 昭治、辻 基一、中尾文行、中野純明、平木秋夫、若林礼次郎、渡部義就、和田 稔、植田博和、全京都建設協同組合の作業員

技術補佐員・調査補助員・整理員

安藤道子、池庄司淳、井上礼子、岩松 隆、小田暁星、上野恵己、太田美枝子、大谷 弘、河合澄子、久保直子、桑原智子、佐藤陽子、坂根 瞬、田中京子、谷村雅世、野村江美子、藤田加津子、船戸裕子、光永直美、宮崎幸三、向山智栄、村田美智子、森 昌彦

付表1 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所 在 地	土地所有者	現地調査期間	調査面積	備 考
長岡京跡右京 第582次	7ANISF-1	長岡京市 今里庄ノ瀬32	能勢 明	1997年10月27日 1997年12月26日	110m ²	今里車塚古墳 今里遺跡
長岡京跡右京 第604次	7ANJKK-5	長岡京市 長法寺北島10-1他	懶山中商事	1998年5月19日 1998年7月6日	287m ²	長法寺七ツ塚 古墳群
長岡京跡右京 第626次	7ANGKM-1	長岡京市 井ノ内鏡山7他	小林茂一 斎藤 登	1998年12月7日 1999年2月3日	580m ²	西四坊大路 推定地
長岡京跡右京 第631次	7ANMKI-6	長岡京市 東神足二丁目7	神足久子	1999年2月1日 1999年3月12日	84m ²	神足遺跡 神足城跡 勝龍寺城跡
走田古墳群 第3次	7CKPME-4	長岡京市 奥海印寺明神前31	宗教法人 寂照院	1997年12月15日 1998年1月23日	111m ²	海印寺跡



第1図 本書報告調査地位 地図 (1/40000)

本文目次

第1章 長岡京跡右京第582次調査概要	1
1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物	
5 まとめ	
第2章 長岡京跡右京第604次調査概要	25
1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物	
5 まとめ	
第3章 長岡京跡右京第626次調査概要	35
1 はじめに 2 調査概要	
第4章 長岡京跡右京第631次調査概要	37
1 はじめに 2 調査概要	
第5章 走田古墳群第3次・海印寺跡第4次調査概要	39
1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物	
5 まとめ	

図 版 目 次

長岡京跡右京第582次調査

- 図版 一 (1) 調査地全景 (北西から)
 (2) 完掘状況全景 (西から)
- 図版 二 (1) 第2トレンチ検出の中・近世遺構 (東から)
 (2) 第2トレンチ検出の中・近世遺構全景 (南東から)
- 図版 三 (1) 第2トレンチ検出の平安時代遺構全景 (南東から)
 (2) 第2トレンチ検出の今里車塚古墳周濠 (南東から)
- 図版 四 (1) 第2トレンチ完掘状況全景 (南西から)
 (2) 平安時代の掘立柱建物SB10 (東から)
- 図版 五 (1) 飛鳥時代の溝SD12 (南から)
 (2) 溝SD12の側板と杭検出状況 (西から)
- 図版 六 (1) 第1トレンチの中世面全景 (北東から)
 (2) 第1トレンチの平安時代面 (北東から)
- 図版 七 (1) 第1トレンチの今里車塚古墳前方部葺石崩落状況 (東から)
 (2) 第1トレンチの今里車塚古墳前方部調査状況 (北東から)
- 図版 八 (1) 今里車塚古墳前方部封土検出状況 (北西から)
 (2) 今里車塚古墳前方部土層堆積状況 (北から)
- 図版 九 (1) 第1トレンチ南拡張部西断面 (東から)
 (2) 第1トレンチ南拡張部東断面 (西から)
- 図版一〇 (1) 柱材出土状況 (北から)
 (2) 柱材出土状況 (西から)
 (3) 紡錐車状木製品出土状況 (南東から)
 (4) 下駄出土状況 (東から)
 (5) 横出土状況 (北から)
 (6) 田下駄状木製品出土状況 (北から)
 (7) 笠状木製品出土状況 (北から)
 (8) 柱材出土状況 (北から)
- 図版一一 (1) 緑釉陶器と緑釉素地形態須恵器の椀皿類
 (2) 須恵器鉢・黒色土器椀
- 図版一二 (1) 灰釉陶器の椀皿類
 (2) 緑釉陶器の壺類と椀皿類陰刻花文・線刻記号

- 図版一三 (1) 輸入磁器
 (2) 形象・線刻埴輪類
 図版一四 墓書土器・軒丸瓦・錢貨

長岡京跡右京第604次調査

- 図版一五 (1) 発掘調査地全景 (北西から)
 (2) 発掘調査地全景 (南から)
 図版一六 (1) 七ツ塚1号墳および第1トレンチ全景 (東から)
 (2) 第1トレンチ全景 (北から)
 (3) 第1トレンチ全景 (南から)
 図版一七 (1) 七ツ塚2号墳および第2トレンチ全景 (西から)
 (2) 第2トレンチ全景 (南西から)
 図版一八 (1) 七ツ塚2号墳周溝検出状況 (南から)
 (2) 七ツ塚2号墳周溝検出状況 (北西から)
 図版一九 (1) 七ツ塚2号墳西側周溝 (南から)
 (2) 七ツ塚2号墳北側周溝 (南西から)
 図版二〇 (1) 周溝内須恵器甕出土状況 (南から)
 (2) 第2トレンチ完掘状況 (南西から)
 図版二一 (1) 七ツ塚2号墳周溝出土遺物-1
 (2) 七ツ塚2号墳周溝出土遺物-2

走田古墳群第3次・海印寺跡第4次調査

- 図版二二 (1) 第1区全景 (南東から)
 (2) 走田10号墳全景 (南から)
 (3) 走田10号墳全景 (北から)

挿 図 目 次

第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000) iii

長岡京跡右京第582次調査

第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図 平安時代と長岡京期の検出遺構図 (1/400)	2
第4図 飛鳥時代と古墳時代の検出遺構図 (1/400)	2
第5図 弥生土器と古墳時代～平安時代の土師器実測図 (1/4)	5
第6図 墨書き土器・壺B・土馬実測図 (1/4)	6
第7図 製塩土器実測図 (1/4)	6
第8図 黒色土器実測図 (1/4)	6
第9図 古墳時代～飛鳥時代の須恵器実測図 (1/4)	7
第10図 須恵器椀・皿・杯・壺実測図 (1/4)	8
第11図 須恵器鉢実測図 (1/4)	8
第12図 須恵器椀・皿実測図 (1/4)	10
第13図 灰釉・綠釉陶器実測図 (1/4)	11
第14図 墨書き土器実測図 (1/4)	12
第15図 輸入磁器実測図 (1/4)	12
第16図 銭貨拓影図 (1/2)	12
第17図 軒瓦・平瓦実測図 (1/4)	12
第18図 埋輪実測図-1 (1/4)	14
第19図 埋輪実測図-2 (1/4)	15
第20図 埋輪実測図-3 (1/4)	16
第21図 木製品実測図-1 (1/4)	18
第22図 木製品実測図-2 (1/4、1/10)	19
第23図 木製品実測図-3 (1/4、1/10)	20
第24図 木製品実測図-4 (1/4、1/10)	21
第25図 石器・石製品実測図 (1/2)	22

長岡京跡右京第604次調査

第26図 発掘調査地位置図 (1/5000)	25
第27図 七ツ塚古墳群調査地位置図 (1/1500)	26
第28図 検出遺構図 (1/200)	27

第29図 調査地土層図 (1/80)	28
第30図 七ツ塚2号墳周溝実測図 (1/150)	31
第31図 七ツ塚2号墳周溝土層図 (1/80)	32
第32図 七ツ塚2号墳周溝出土遺物実測図 (1/4)	33

長岡京跡右京第626次調査

第33図 発掘調査地位置図 (1/5000)	35
第34図 1トレンチ全景 (東から)	36
第35図 溝SD02検出状況 (西から)	36

長岡京跡右京第631次調査

第36図 発掘調査地位置図 (1/5000)	37
第37図 神足神社周辺に残る土壘 (1984年)	38
第38図 勝龍寺城付近の地形 (1922年)	38

走田古墳群第3次・海印寺跡第4次調査

第39図 発掘調査地位置図 (1/5000)	39
第40図 調査区土層図 (1/100)	40
第41図 調査区配置図 (1/200)	41
第42図 第1区検出造構図 (1/100)	43
第43図 走田10号墳実測図 (1/50)	44
第44図 第2区検出造構図 (1/100)	45
第45図 第3区検出造構図 (1/100)	45
第46図 出土遺物実測図 (1/4)	46
第47図 調査地周辺地形図 (1/1000)	47

付 表 目 次

付表1 本書報告調査一覧表.....	ii
付表2 黒色土器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・墨書き土器出土造構一覧.....	23
付表3 木製品・石器・石製品出土造構一覧.....	23
付表4 第6～8層出土土器類の構成.....	24
付表5 走田古墳群の横穴式石室一覧表.....	48
付表6 報告書抄録.....	49

第1章 長岡京跡右京第582次（7ANISF-1地区）調査概要

——長岡京跡右京三条二坊十三町・今里車塚古墳・今里遺跡——

1 はじめに

- 1 本報告は、京都府長岡京市今里庄ノ瀬32において実施した約110m²の発掘調査の遺物整理報告である。整理事業は1998年6月1日から10月30日まで実施した。なお、現地調査は、1997年10月27日から12月26日まで、宅地開発とともにさう事前調査として、地下破壊の恐れが少ない駐車場予定位置でおこなった。現地報告は、平成9年度国庫補助事業として概略を報告している。^(注1)
- 2 当調査の目的は、長岡京期の宅地利用状況を探ると共に、今里車塚古墳外堤線を具体的に捉えることや、今里遺跡に関する資料を得ることであった。本年度の遺物整理の目的は、各構造の時期決定や性格付けの証左を明らかにするとともに、出土遺物の特徴や傾向を具体的に示すことがある。
- 3 当事業は、長岡京市教育委員会が主体となり（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書掲載の墨書き器については、京都産業大学の井上満郎先生のご協力により、同大学所有赤外線カメラを使用させていただいた。文字判読には、向日市の清水みき氏の御教示を得た。
- 図版の遺物写真は写房 楠華堂の内田真紀子による撮影である。

- 5 本報告の執筆・編集は、岩崎 誠が担当した。



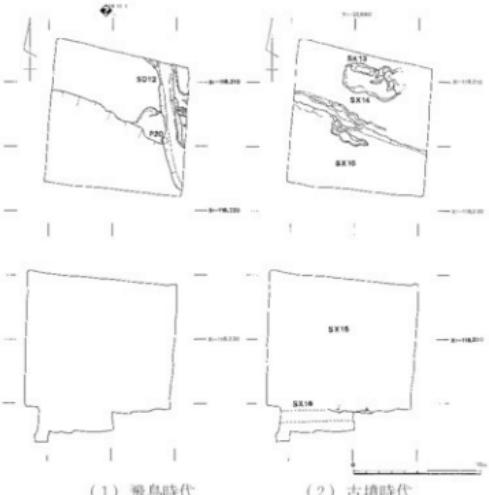
第2図 発掘調査位置図 (1/5000)

2 調査経過

調査地は阪急長岡天神駅の北約1400mの位置で、府道西京高槻線に面した東隣地である。立地は氾濫原Ⅰにある標高約27.3mの水田地である。調査は水田耕作土を重機で除去し、以下を調査対象



第3図 平安時代と長岡京期の検出遺構図 (1/400)



第4図 飛鳥時代と古墳時代の検出遺構図 (1/400)

とした。基本層序は、第6層～第8層までが平安時代の堆積、第9層は長岡京期、第25層から第27層は飛鳥時代、第29・30層が古墳時代の堆積であった。ここでは、平安時代と飛鳥時代の今里遺跡、長岡京跡、今里車塚古墳に関する出土遺物を中心に報告する。

3 検出遺構

検出遺構には、近・現代溝群や落込み、中世溝群、平安時代の掘立柱建物や土坑など(第3図1)、長岡京期の溝(第3図2)、飛鳥時代の溝(第4図1)、古墳時代の今里車塚古墳前方部周濠や土壙墓(第4図2)などがある。

近・現代溝群や落込みや中世溝群は第6層上面で検出した。長岡京期の東西方向溝SD17は今里車塚古墳周濠内堆積第26層上面からの掘り込みであった。飛鳥時代の溝SD12は、今里車塚古墳周濠の北側で第7層を除去して検出したが、この溝の堆積は古墳周濠堆積の第27層と第30層の間にみられた。古墳時代の遺構は、古墳封土と考えられる調査区南辺以外は無遺物地山層上面での検出であった。これらは既に報告しており、補足的に図版写真一一〇を提示した。

4 出土遺物

出土遺物には、旧石器時代から中・近世まで、幅広い時代のものが出土した。新しい時代のものには、室町～江戸時代前後の16世紀後半から17世紀頃の陶磁器・金属製品のキセルや簪・永樂錢、鎌倉時代13世紀後半の土師器・瓦器・輸入磁器など、中・近世遺物類がある。ここでは今里車塚古墳関係の他、長岡京期と平安時代に関する遺物群を中心に報告する。古墳時代後期から飛鳥時代の遺物も非常に多いが、充分な整理ができなかった。また平安時代の遺物のうち、土師器類の整理は不十分で、代表的なものの提示にとどまった。弥生時代の遺物も後期を中心に出土しているが、一部の報告にとどまった。以下、土器・土製品類、錢貨、瓦、埴輪、木器・木製品類、石器・石製品類の順に概観する。

〔土師器・製塙土器・土製品・黒色土器・弥生土器〕

1 平安時代の土師器・黒色土器

土師器杯・椀類には、法量の大きい口径16.3cm、器高3.3cm前後のもの（第5図1）と、法量の小さい口径14.0～14.8cm、器高2.3～2.5cmのもの（第5図2・3）の2種がある。図示したものの他に掘立柱建物SB10P1（口径13.3cm、器高2.6cm）や第4～6層からも出土している。掘立柱建物SB10P2からは、口径12.6cm、器高1.3cm前後の皿と思われる破片などが出土している。いずれも口縁部が屈曲して端部を内面側に巻き込むように処理している。器形の特徴や法量から、平安京II期中段階から新段階の様相に近い。10世紀前葉前後の年代が考えられる。

煮炊具の土師器羽釜は、石英砂粒を多く含んだ独特の胎土の製品が多く出土している（第5図11）。

黒色土器（第8図）には椀（1～4）、壺（5）、鉢（8）、甕（6・7）がある。

椀には、口径15cm前後、器高5cm弱の法量をもつもの（1・2）と、口径16cm前後、器高5cm強の法量をもつもの（3・4）がある。いずれも内面には緻密なヘラミガキを施す。

壺（5）や鉢（8）は、内外面を緻密なヘラミガキで仕上げている。

甕には、わずかに外反して広がる口縁部をもつもの（6）と、強いナデにより断面「3」字形に屈曲するもの（7）がある。

この他、白色土器の三足盤の脚部と思われるもの（第5図8）も1点出土している。

2 長岡京期前後の土師器・土製品

この時期の土師器には、椀A（第5図4）、皿A（同図6）、皿C（同図5）、杯B（同図9）、壺E（同図7）、甕（同図10・第6図5）、壺B（第6図1～4）、墨書き人面土器（同図3～5）、土馬（同図6・7）、製塙土器（第7図）などがある。

椀Aは、口径10.8cm、器高3.3cmの小型品で、口縁部下半をヘラケズリしているもの（4）があるが、口縁端部までヘラケズリしたものも、溝SD17などから出土している。4は後出的と考えられる。

皿Aは、口縁端部までヘラケズリしたもの（6）で、溝SD17などからも出土している。皿Cは、

4 出土遺物

口径8.4cm、器高1.6cmの小型の皿で、口縁部をヨコナデし、ヘラケズリは行わない（5）。崩落した葺石の間から出土し、今里車塚古墳前方部の崩落が長岡京期以後であることがわかる。

杯Bには、口径25cm、器高9.5cmの製品がある（9）。外面にヘラミガキが施されている。平安京I期中段階前後の器形的特徴と法量をもち、長岡京期以前の製品と考えられる。

壺Eは7以外に数点が出土した。胎土はいずれも類似し、赤橙褐色に焼き上がっている。

甕はA形態のいわゆる都城型甕が多く（10・5）、G形態のものも見られる。5には墨痕がみられ、人面土器として用いられている。これらの中には平安京建都後の製品も含まれている可能性があるが、とりあえず長岡京期前後とした。

壺Bは、口縁部を内側に肥厚させたもの（3・4）と、まるくおさめたもの（1）、頸部の屈曲がなく体部に指先で押された窪みをもうけたもの（2）がある。1・2には墨痕がない。3・4には人の顔を墨で描いており、墨書人面土器として用いている。同形態で墨痕が無い破片も溝SD17などから出土している。

土馬は5個体出土しているが、いずれも破片で、大型のもの（6ほか体部から脚部片2個体）と、小型のもの（7ほか脚部片1個体）がある。

製塙土器は、口縁部と体部の境がなく、端部を内湾させて、内外面に指圧痕を多く残すもの（3・5）、体部から端部まで直線的で、内外面に指圧痕をおおく残すもの（1・2）、体部から端部まで直線的で、端部に外傾する面を作り出し、内面に布目圧痕を残すもの（4）がある。

3 飛鳥時代の土師器

この時期の土師器には、杯C（第5図12）、杯B（同図15）、杯G（同図13・14）、高杯（同図17・18）、甕（同図16・19～25）などがある。

杯C（12）は口径10.4cm、器高3.6cmで、内面に放射状暗文が施されている。杯G（13・14）は口径13.4cm、器高3.4～4cmで、底部外面に指圧痕が残り、暗文は施さない。14の底部にはヘラ記号が施されている。杯B（15）は低い高台をもつもので、口縁部外面をヘラミガキで仕上げ、内面には放射状暗文が施されている。高杯は、柱状部から境目なく滑らかに外反して広がる裾部をもつもの（18）と、柱状部外面や裾部内面に布目圧痕を残すもの（17）がある。甕には、内外面をヘラミガキで仕上げたもの（16）と、外面ハケメ調整のものがあり、後者には把手をもつもの（19～23）、突帯をもつもの（25）、把手や突帯をもたないものなどがある。把手部には、上面から切込みを2箇所にいたしたもの（19・21）、切込みを1箇所にいたしたもの（20・23）、切込みをいれないもの（22）がある。このうち22と24の胎土が酷似し、同一個体の可能性がある。口縁部はまるくおさめる。P形態の甕である。23と25の胎土も酷似している。口縁部は、わずかに内湾しながら立ち上がり、端部は凹面をなす。L形態の甕である。

4 弥生土器

弥生土器は後期が多くわずかに中期も含まれていた。器形には壺・甕・高杯・鉢などがあり、壺には広口壺の口縁部を下方に肥厚させ、広い端面を作り出して凹線文を6条巡らせ、その上に円形浮文を配して円形竹管文を刺突しているものがある（第5図26）。生駒西麓産の胎土で、角閃



第5図 弥生土器と古墳時代～平安時代の土師器実測図 (1/4)

石を多く含む。他に近江系の受け口状口縁をもつ甕や鉢類が多く、体部上端に柳描直線文や列点文を配したものなどが目立ち、手焙形土器の破片も見られる(第5図27)。壺や甕の底部片も多い。これら弥生時代の土器類は、今里車塚古墳周濠内の初期の堆積から平安時代の遺物を含む層まで、各層に含まれていた。

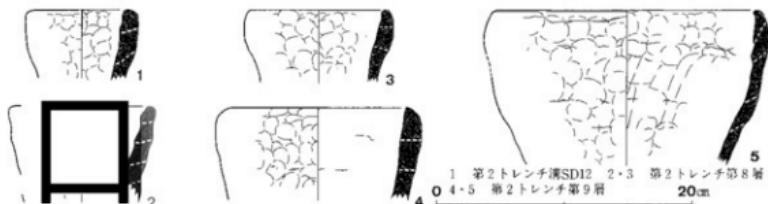
【須恵器】

1 古墳時代～飛鳥時代の須恵器

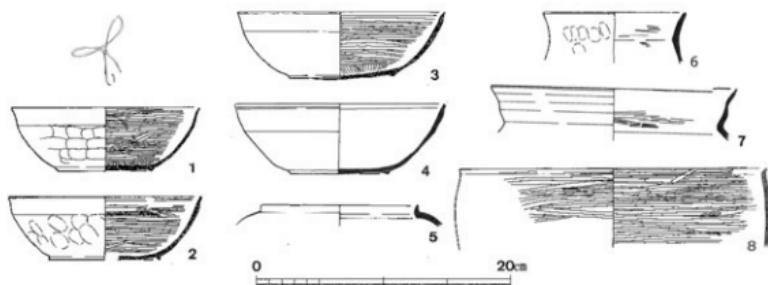
古墳時代後期、6世紀代の須恵器と考えられるものに、杯身、杯蓋、高杯(第9図13)、器台、甕(同図15)、提瓶(同図16)、横瓶(同図17)などがある。甕には、体部外面格子目叩き、内面丁寧なナデの調整をもつ破片(同図14など)が5種類あり、これらの甕は5世紀代に遡る可能性がある。



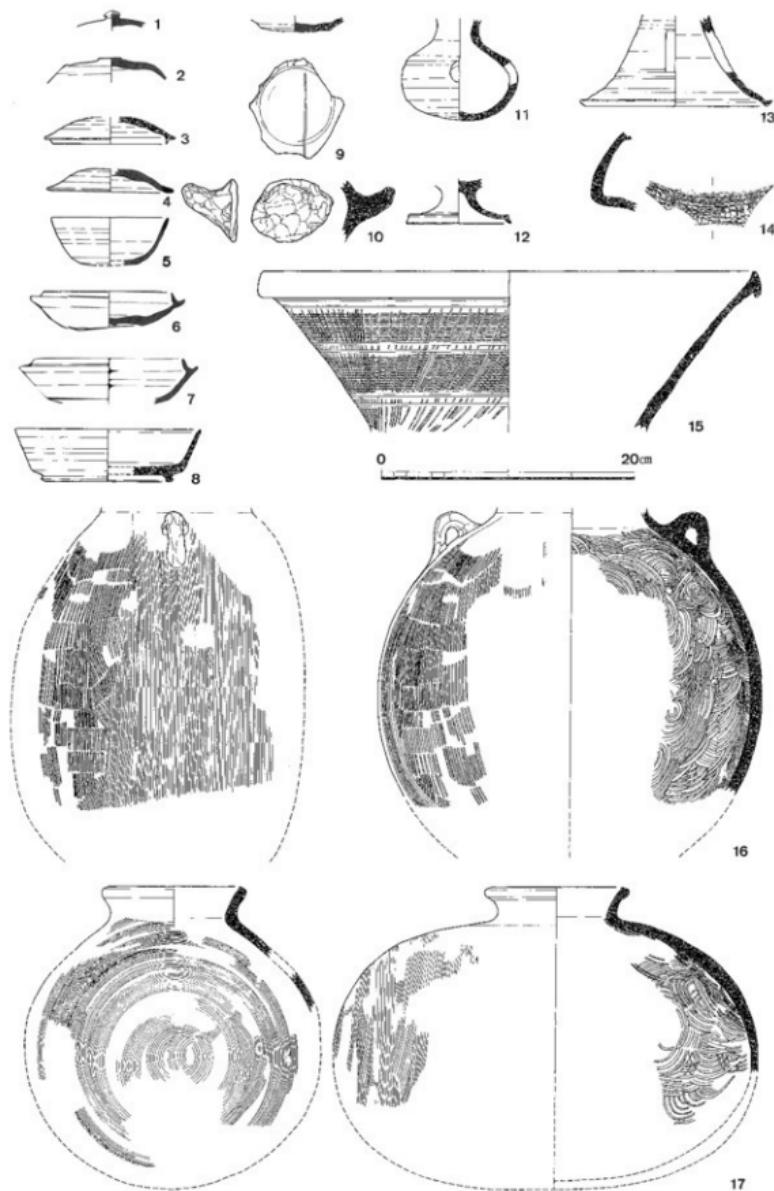
第6図 墨書き面土器・壺B・土馬実測図(1/4)



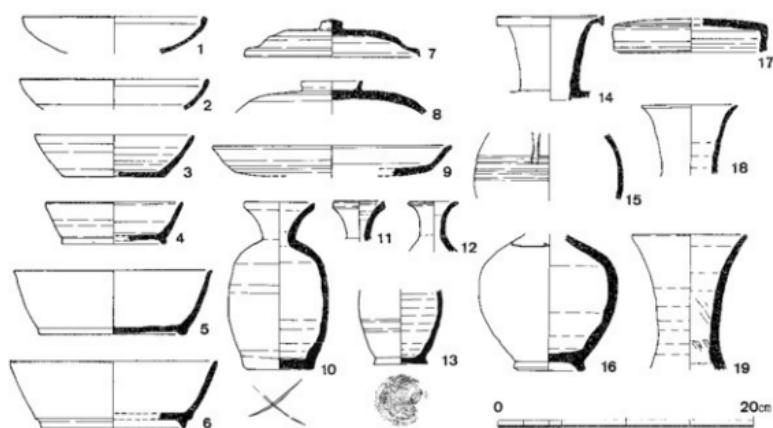
第7図 製塩土器実測図(1/4)



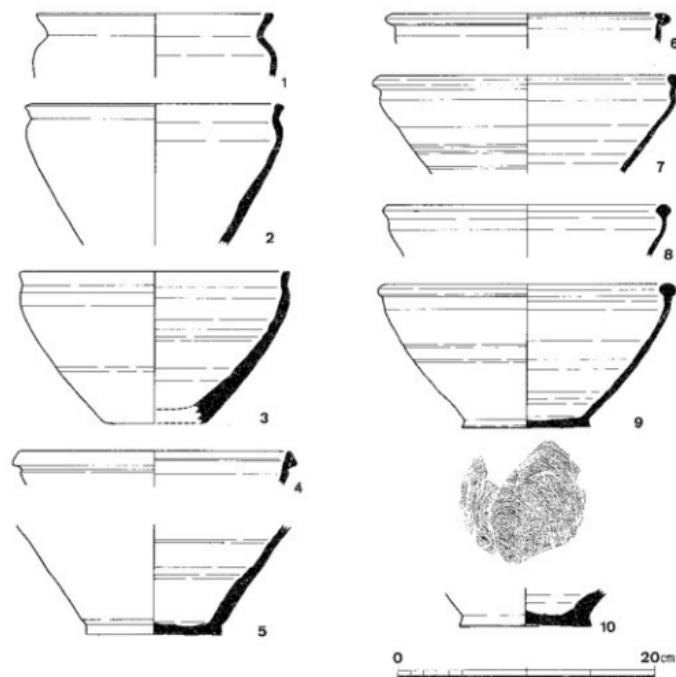
第8図 黒色土器実測図(1/4)



第9図 古墳時代～飛鳥時代の須恵器実測図 (1/4)



第10図 須恵器椀・皿・杯・壺実測図 (1/4)



第11図 須恵器鉢実測図 (1/4)

飛鳥時代の須恵器には、杯G蓋（第9図1～4）、杯H（同図6・7・9）、高杯（同図12）、越（同図11）、甌、把手（10）などがある。これらは、今里車塚古墳周濠の下層近くからも出土し、周濠があまり堆積していない段階から、飛鳥時代に埋まりはじめていたことが窺える。

2 奈良時代～長岡京期前後の須恵器・墨書き土器

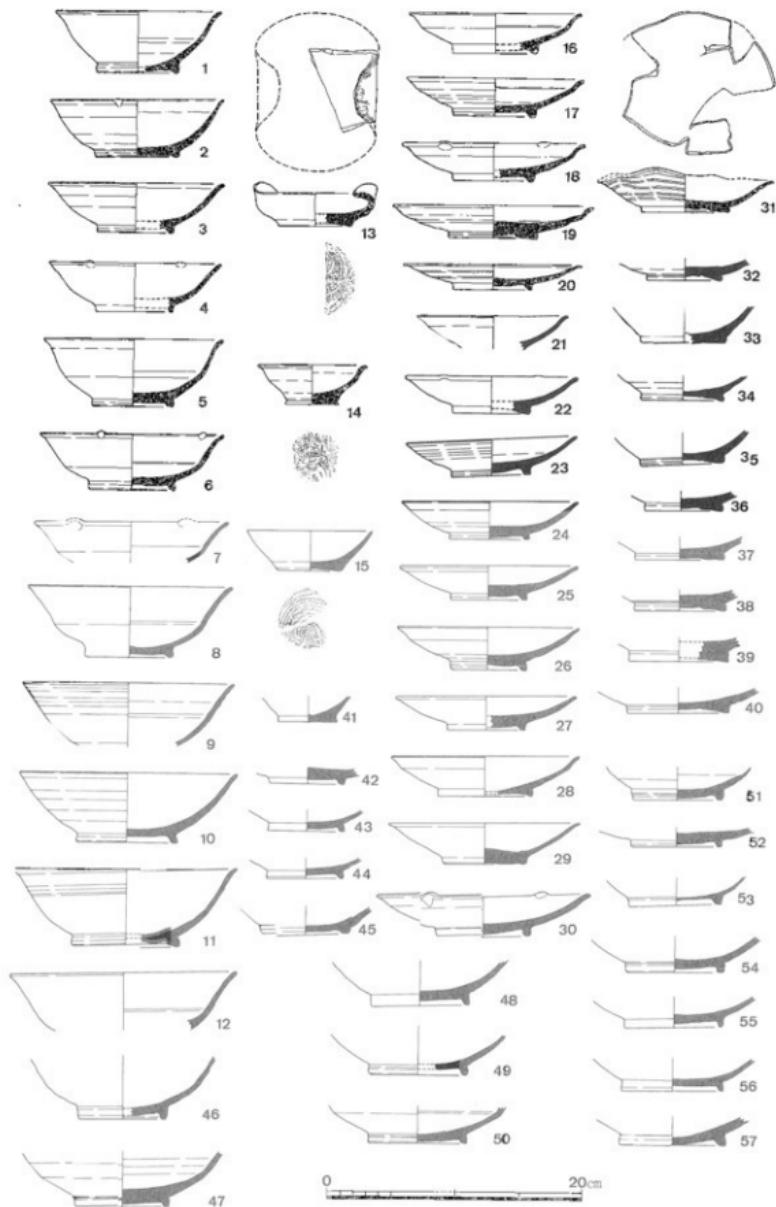
この頃の須恵器には、杯A（第9図5）、杯B（第9図8・第10図4～6・第14図2～4・7）、杯B蓋（第10図7・8・第14図1）、皿A（第10図9・第14図5）、壺L（第10図14・16）、壺G（同図18・19）、壺A蓋（同図17）、鉢D（第11図1）、甌などがある。杯Bの8は奈良時代に遡るものであろうが、他のものは、長岡京期から平安建都前後と考えられる。長岡京期に限定できそうなものに、墨書き土器もある（第14図1～5・7）。1は杯B蓋天井部に描かれた鳥の絵であろうか。2は杯B底部に書かれたもので、2文字見えるが、「×彌カ」と考えられる。5は2文字と、方向を違えた墨痕がみられ、2文字部分は「黄×」または「草×」かと思われる。

3 平安時代の須恵器

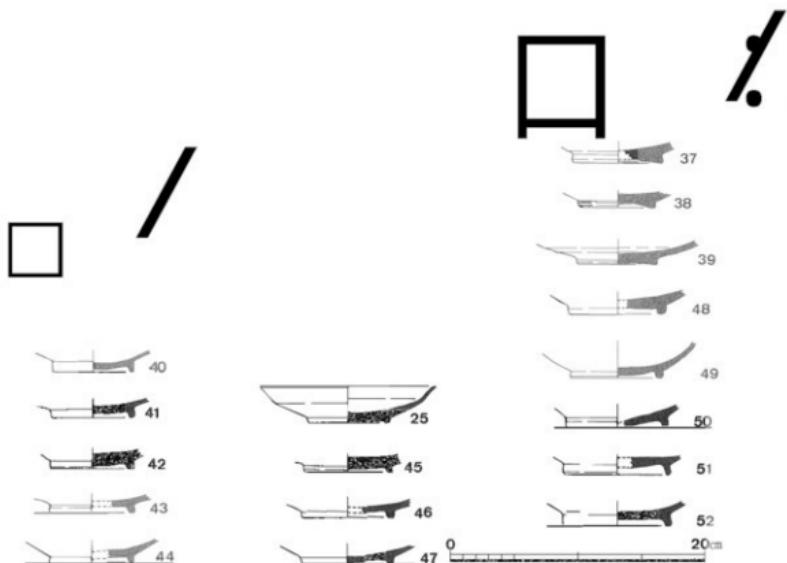
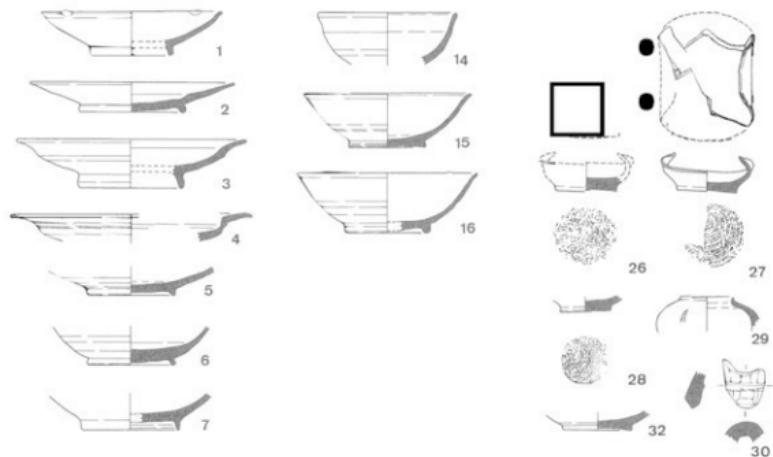
平安時代の須恵器には、椀（第10図1・2・第12図1～12・14・15・第14図6・8・9）、皿（第12図16～31）、耳皿（同図13）、鉢（第11図2～10）、壺L（第10図10～13・15）、甌などがある。

椀皿類には、縁釉陶器と同形態のものと、まったく系譜を異にするもの（第10図1・2）がある。前者の椀皿類には、軟質で白色または黄白色に発色したもの（1・15・41・37・40）や、焼きは硬いが黄灰色から黄褐色に発色したもの（5・20・28・30・35・36・38）と、灰色から暗灰色に硬く焼き上がった他の製品がある。椀皿類の底部には、平底（41）、回転糸切りの平底（13～15）、蛇の目高台（19・22・28・29・31～40）、削り出し輪高台（1～6・8・10・11・16～18・20・23～27・30・42～57）がある。口縁部には輪花口縁になるものが、椀と皿ともに見られる（2・4・6・7・18・30）。椀には底部から直線的に広がる口縁部をもつもの（15）、稜椀形態のもの（5～9・12）、内面に段がなく、外面も滑らかに外反するもの（1～4・10・11）がある。法量により、口径8.6cm、器高3.1cm（14）と、口径9.7cm、器高3.1cm（15）の小型品2種＝椀I、口径13.1cm、器高4.9cm（1）の椀II、口径が13.6～14.4cm、器高3.9～5.3cm（2～6）の椀III、口径15.3～15.8cm、器高4～5.6cm（7・8）の椀IV、口径16.6～18cm、器高5.5～6cm（9～12）の椀Vに分けることができる。また口径に比して器高が低いもの（3・4・10）がある。皿には口縁部を屈曲させた稜皿形態のもの（16～19）と、口縁部が屈曲しないもの（20～30）がある。後者には、口縁部の器壁が非常に薄く、器高が低い偏平なもの（20）がある。20を除く皿は法量により、口径12cm、器高3cm前後の小型品（21）の皿I、口径13.4～14.3cm、器高2.9～3.4cm（16～18・22～27）の皿II、口径14.8～15.7cm、器高2.5～3.2cm（19・28・29）の皿III、口径16.8cm、器高3.2cm（30）の皿IVに分けられる。

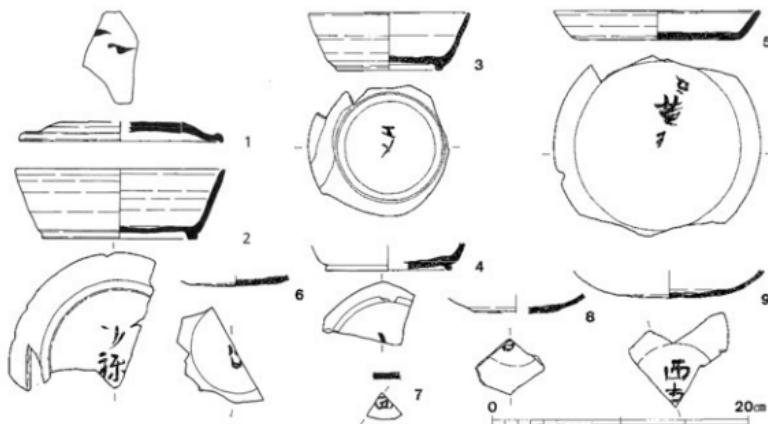
鉢には直線的に立ち上がる口縁部（2～3）、玉縁状に丸く肥厚させた口縁部（6～9）、外面側を断面三角形に肥厚させた口縁部（4）の3形態がある。底面には糸切り底がみられる（5・9・10）。6は瓦質で、2・4・5・10は灰白色で軟質。他は灰色から暗灰色で硬質である。



第12図 須恵器碗・皿実測図 (1/4)



第13図 灰釉・緑釉陶器実測図 (1/4)



第14図 墨書き土器実測図 (1/4)



第15図 輸入磁器実測図 (1/4)



第16図 銭貨拓影圖 (1/2)



第17図 軒瓦・平瓦実測図 (1/4)

〔灰釉・綠釉陶器〕

灰釉陶器（第13図1～9）と綠釉陶器（第13図10～52）は全て平安時代の所産で、灰釉陶器には、皿（1～5）、楕（6～8）、壺（9）などがあり、綠釉陶器には楕（10・14～23）、皿（11・24・25）、耳皿（26・27）、三足または四足小壺（29）、多口瓶ではないかと思われる細片（30・31）などがある。30・31の内面には施釉されていない。

灰釉陶器の楕は、口縁部を欠くが、内面全面に灰釉が施されている。皿類は、口縁部を屈曲させて水平近くにまで広げた段皿形態（2～4）と、口縁部を屈曲させないものがあり、後者には輪花口縁としたものがある（1）。楕皿とともに、高台断面がいわゆる三日月形のもの（1・3・7・8）と、角張らない台形で低いもの（2・5・6）がある。9は壺L形態の底部と考えられ、低く太い高台をもつ。

綠釉陶器の楕皿類には、鮮明な色調の釉薬が厚くかかり、高台を貼り付けた、トチン使用焼成の東海系の製品（10～13）と、釉の色調や施釉量がさまざま、底部が糸切り平底か削り出し輪高台または蛇の目高台の、重ね焼きを基本とする山城系（14～28・32～52）がある。

東海系の楕皿類には、陰刻花文を内面見込みに配した楕（10）がある。11は輪花口緑皿で、輪花装飾の表現の内面側膨らみが長く垂れ下がっている。

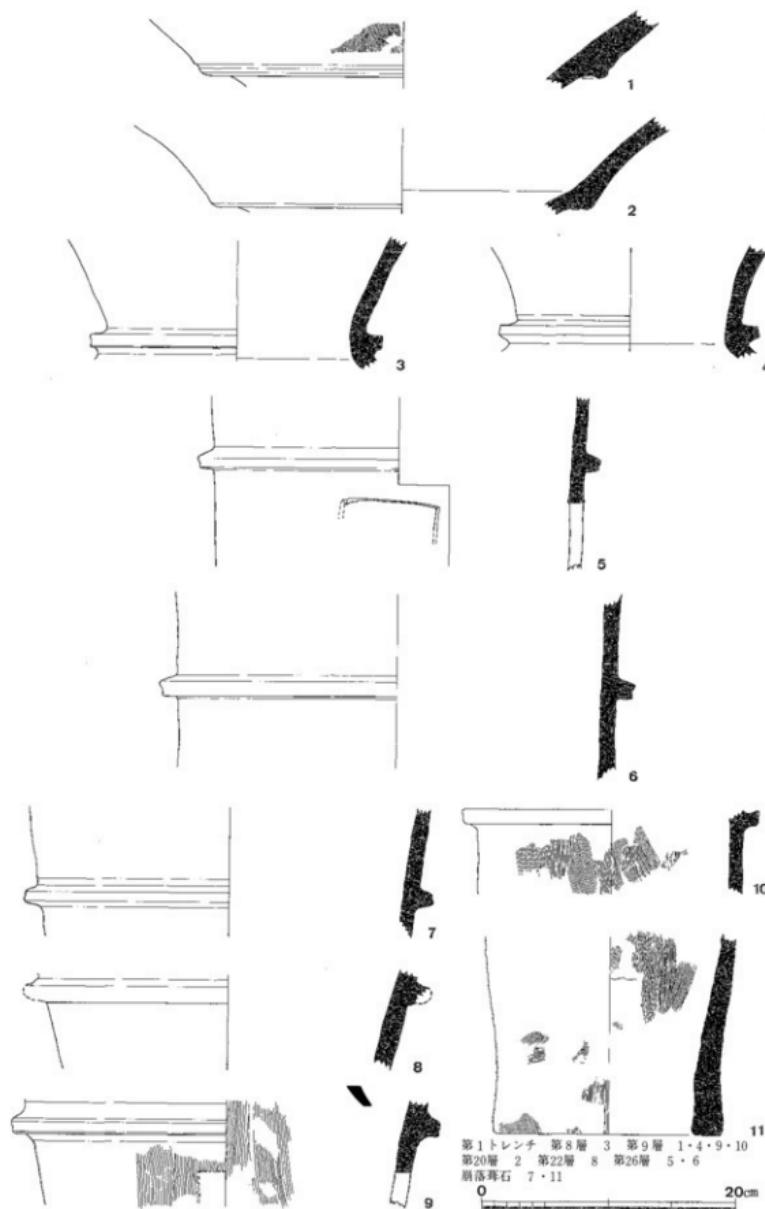
山城系の楕皿類には、稜楕（18）、稜皿（24・25）、輪花口縁の楕皿類（17・22）、口縁端部内面に沈線を1帯巡らせたもの（20・21）があるほかは、底部から滑らかに湾曲して広がる口縁部をもつものである。楕には口径に比して器高が低く浅いもの（20～23）と深いもの（14～19）に分けられ、後者には口縁部の広がりが少なく深みのあるもの（14）もある。14は口径10.7cm、器高4cm以上である。他は法量により須恵器と同様、深い形態では楕IIの15（口径13.2cm、器高4.3cm）、楕IIIの16（口径14.2cm、器高4.1cm）、楕Vの17・18（口径18.7～18.8cm、器高6.2～6.7cm）、楕VIの19（口径21.4cm、器高8.3cm）に分けられる。浅い形態では、楕IIIの23（口径14.3cm、器高3.6cm）、楕IVの22（口径15cm、器高4cm）、楕Vの20（口径18.8cm、器高5.5cm）、楕VIの21（口径21.8cm）に分けられる。皿も法量により、皿IIの25（口径13.8cm、器高3.8cm）と皿IIIの11（口径14.8cm、器高3.6cm）に分かれれる。耳皿を含めた楕皿類の高台も、平底（32）、糸切り平底（26～28）、蛇の目高台（15・19・22・24・33～39）、削り出し輪高台（16～18・20・23・25・40～52）がある。20は幅広い偏平な輪高台で、丁寧にナテ調整を施している。33の底面には「×」の線刻がみられる。

〔輸入磁器〕

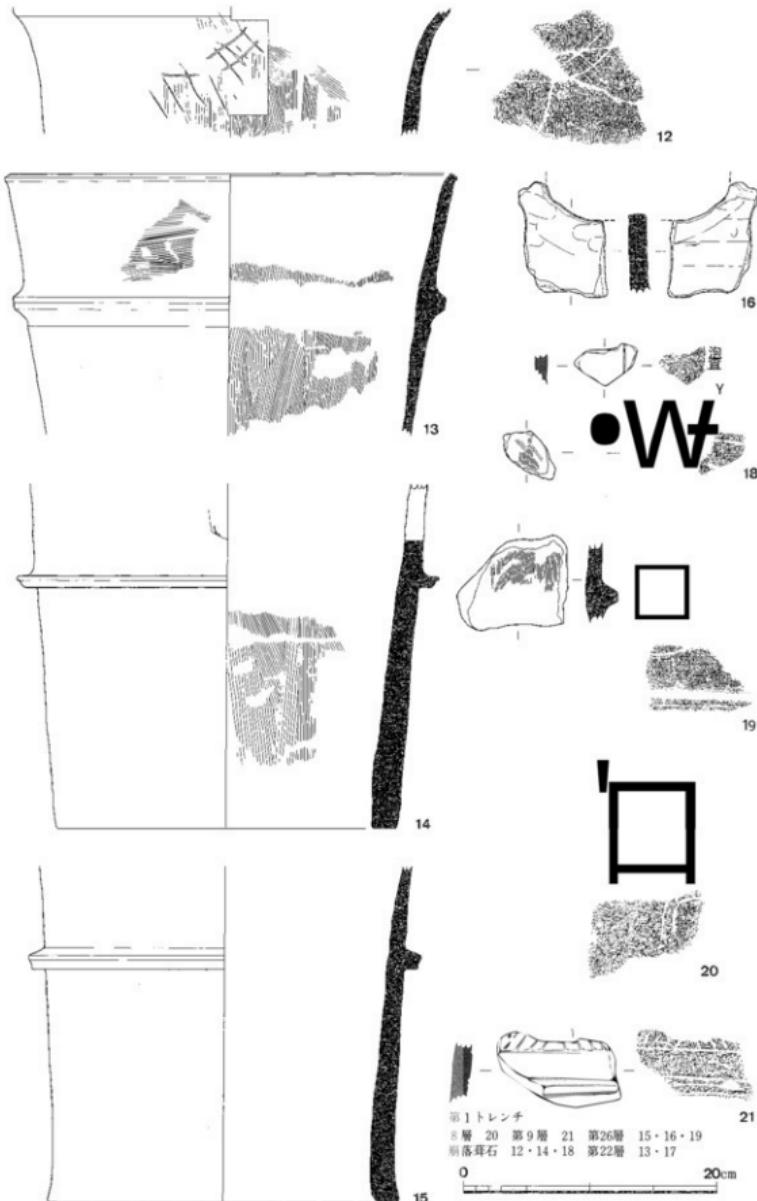
青磁と白磁があり（第15図）、鎌倉時代の白磁（1～3）と平安時代の青磁（4～6）・白磁（7）がある。5・6の底部内外面には目跡がみられる。4は外反する口縁部をもち、5は直線的に広がる口縁部をもつ。

〔銭貨〕

銭貨（第16図）は、第7層から1・2・4が、第8層から3が出土し、第7層から第8層の堆積が寛平大寶初鑄の890年4月以後であることがわかる。



第18図 墳輪実測図-1 (1/4)



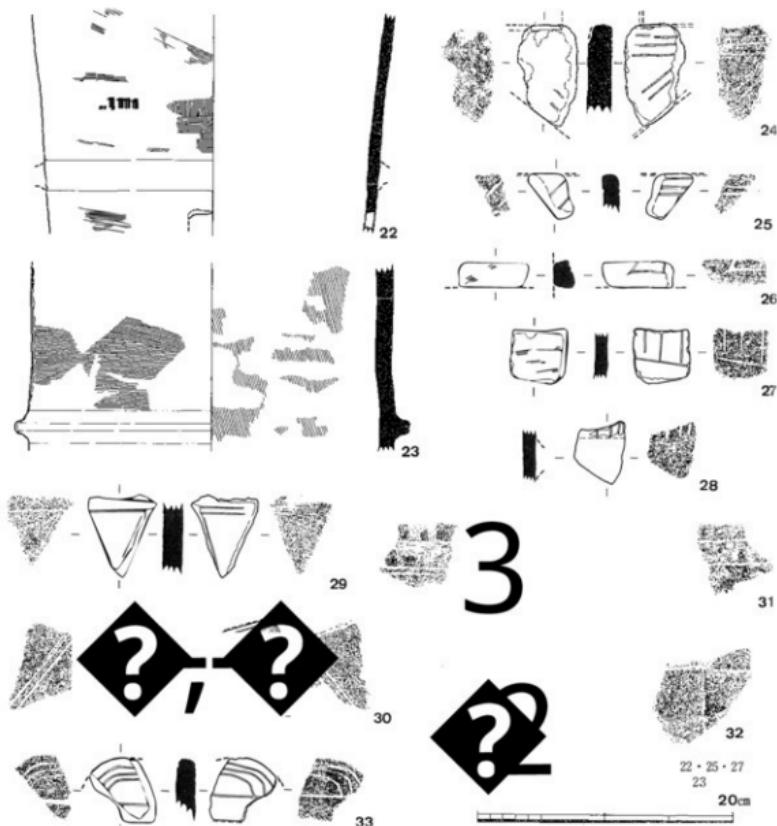
第19図 埼輪実測図-2 (1/4)

〔瓦類〕

瓦は、溝SD17埋土の他、第9層以後の堆積の各層から多く出土している。丸瓦と平瓦の出土総破片数は第1トレンチでは127点、第2トレンチでは453点で、合計580点あった。出土量の違いは、土地利用の差を現し、今里車塚古墳の墳丘側は、長岡京期から平安時代にかけて大規模な改変がなく、もっぱら周濠より北側であったためと考えられる。平瓦と丸瓦ともに凹面に布目压痕をもち、平瓦の大多数と丸瓦の一部の凸面に繩目タタキが施されている。また平瓦には、凸面の繩目タタキが、狭・広両端面に平行する方向に調整されたもの（第17図8）もある。

軒瓦はすべて軒丸瓦で、軒平瓦は出土しなかった。長岡京跡右京第483次調査の右京五条一坊二町の調査では、軒平瓦が6点出土したが、軒丸瓦がなかった成果と対照的である。

第17図1は6134C型式、2は6133E b型式、3は7133型式である。7は6225A型式と思われる。



第20図 墳輪実測図-3 (1/4)

[埴輪]

埴輪（第18~20図）には、朝顔形（1~4）や普通円筒（5~7・9~20・22）と鋸付円筒（8・23）の円筒埴輪類と、盾形埴輪（21）や蓋形埴輪（32）などの形象埴輪がある。第1トレントから2727点、第2トレントから98点、総破片数2825点が出土した。

円筒埴輪には、円形透かし（16）と方形透かし（5・22）がみられる。器面調整には、丁寧なナデの後、外面に赤色顔料を刷毛塗りしたもの（1・4・5）、内外面タテハケ調整を施すもの（9・10・12）、外面にヨコハケ、内面にタテハケ調整を施すもの（11・13・22・23）があり、外面ヨコハケの11・22では、ヨコハケがタテハケ後に施されていることが観察できる。器壁は概して厚いが、極端に薄い器壁をもつものもある（22）。口縁部は円筒部から滑らかに外反して広がるものと、広がらないもの（13）がある。前者には、準構造船を表現したと思われる線刻をもつものがある（12）。この他ヘラ記号と思われる1条または2条の円弧状線刻のあるものが4点ある（17~20）。基底部から口縁部までを復元できるものもなく、タガの条数などは明らかでない。

形象埴輪には、円筒状の破片（21）や板状の破片（24~31・33）に線刻を施したものなどがある。21は長岡市長法寺南原東古墳群3号墳や向日市乾垣内遺跡などでみられる盾形埴輪と考えられる。24や29・30の板状破片は、32と共に蓋形埴輪の可能性がある。

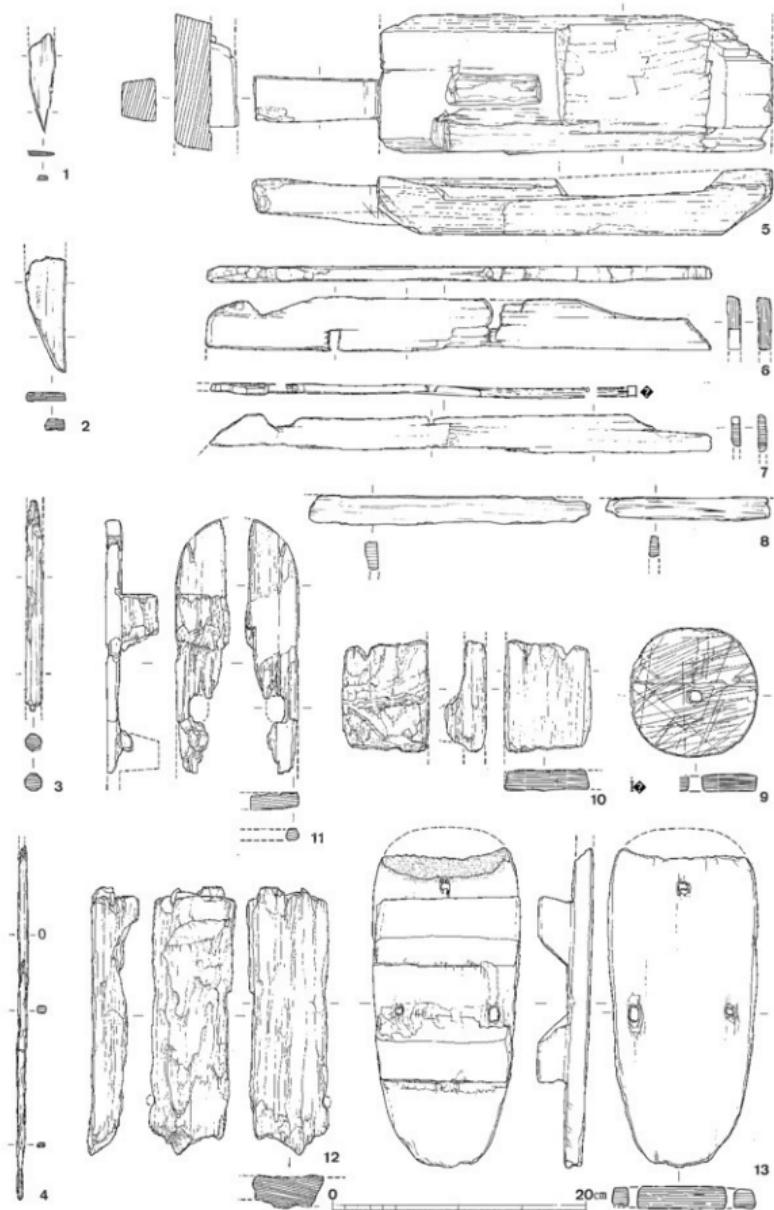
[木製品]

木製品（第21~24図）には長岡京期前後の斎串（1）や箸（4）、古墳時代から飛鳥時代の櫛（5）、鳥形木製品（6~8）、下駄（10~13）、紡錘車形木製品（9）、笠形木製品（14・15）、杭（29・36・37）、側板（33・34）、板材（2・23~28・30~32）、棒状木製品（3）、建築材や柱状木製品（16~22・35・38~40）などがある。このうち20点を株式会社吉田生物研究所に樹種同定を依頼した。樹種同定は木口（横断面）、柵目（放射断面）、板目（接線断面）の切片プレパラートの顕微鏡観察でなされた。吉田生物研究所汐見真氏と京都造形芸術大学岡田文男氏の結果報告によると、5~7・9~13・22・33・37・40がヒノキ科ヒノキ属、14・15・24はコウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ、16・18はマツ科モミ属、38がヒノキ科、39はニレ科ムクノキ属ムクノキ、27はブナ科コナラ属アカガシ亜属であった。コウヤマキの笠形木製品と板材は、今里車塚古墳に関連するものと考えられ、14・15は半球形であることから、木製蓋形埴輪と考えられる。

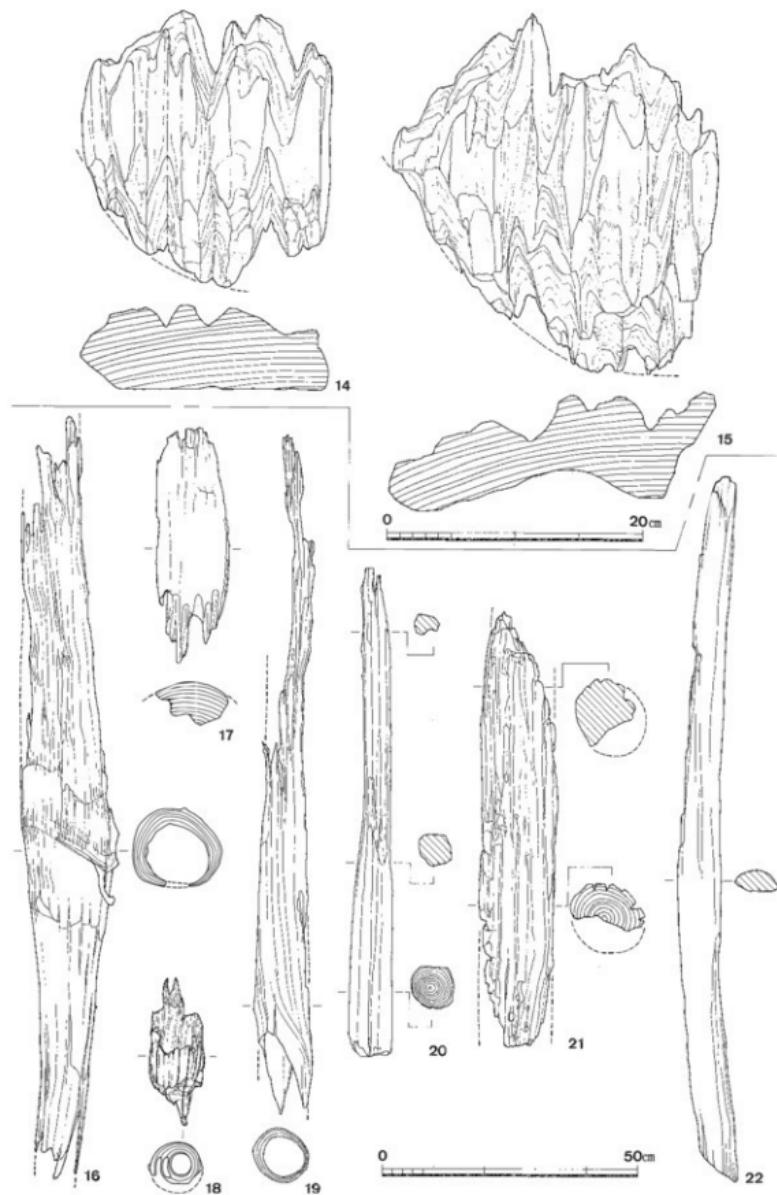
他の木製品の所属時期は、長岡京期前後と考えられるもの（1・4）と飛鳥時代の溝SD12護岸用側板と杭（33・37）以外明らかでない。13の下駄と、24と25の板材には焼け焦げて炭化した部分がみられる（図中網掛け部分）。下駄は、いずれも歯部を張り出すように削り出しており、直立しない。

[石器・石製品]

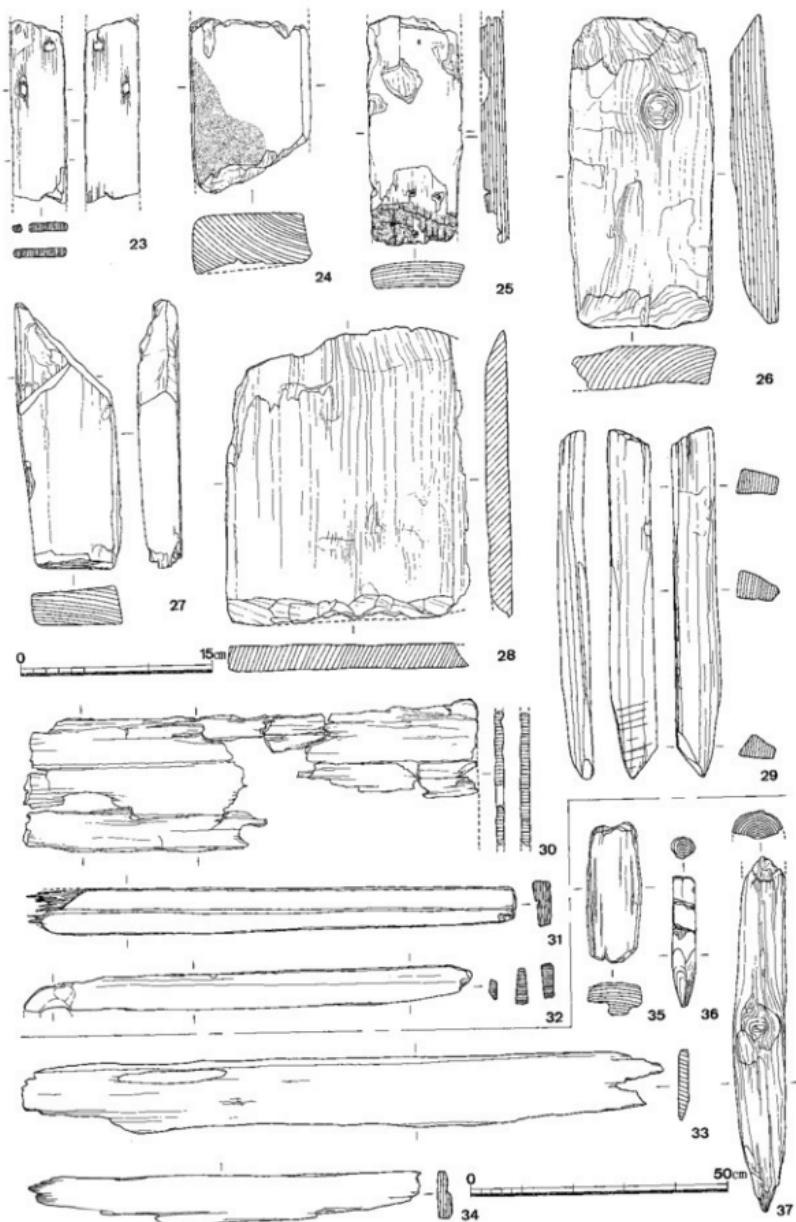
石器や石製品（第25図）には、旧石器時代のナイフ形石器（1）や剥片（2・3）、縄文時代と考えられる磨石（9）、弥生時代の石庵丁（5・6）、石斧と考えられる破片（7）、剥片（4）、古墳時代後期から飛鳥時代頃の紡錘車（10）、平安時代の帯飾り（11）や黒碁石と考えられるもの（12）の他、砥石（8）などがある。



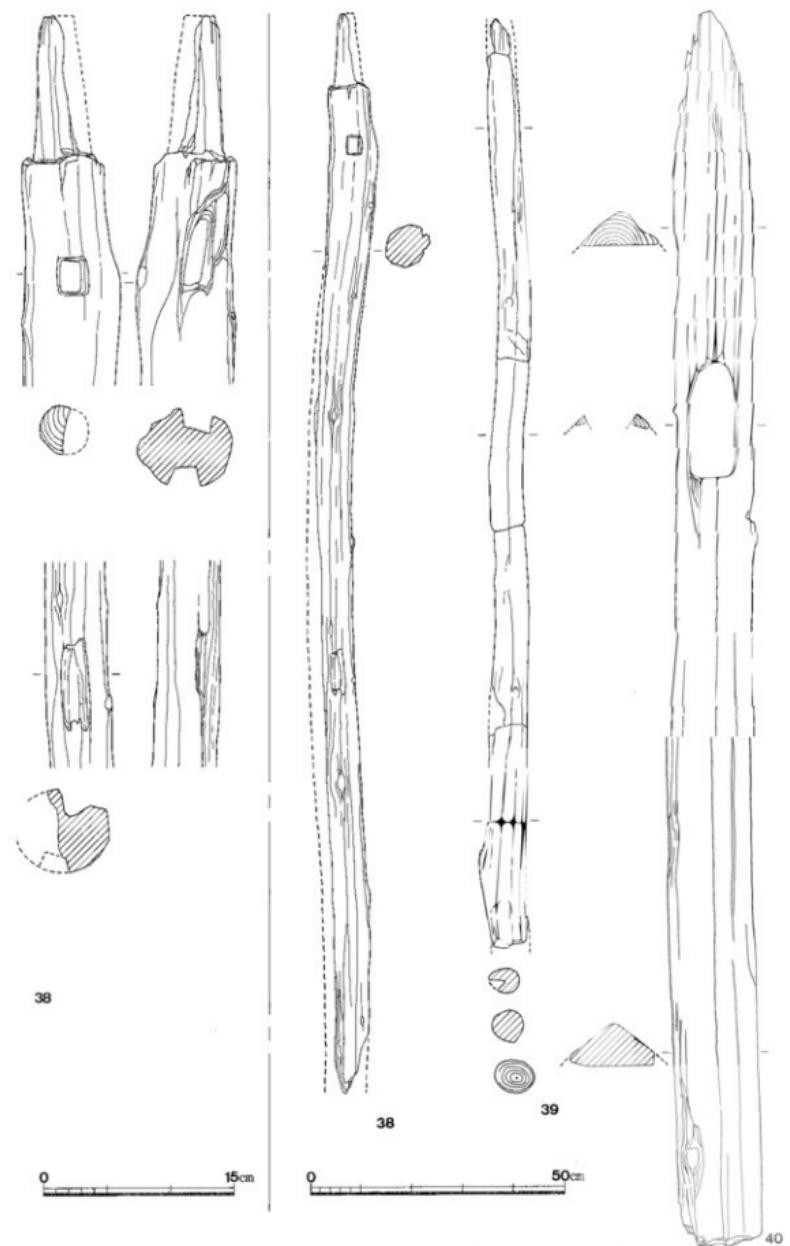
第21図 木製品実測図-1 (1/4)



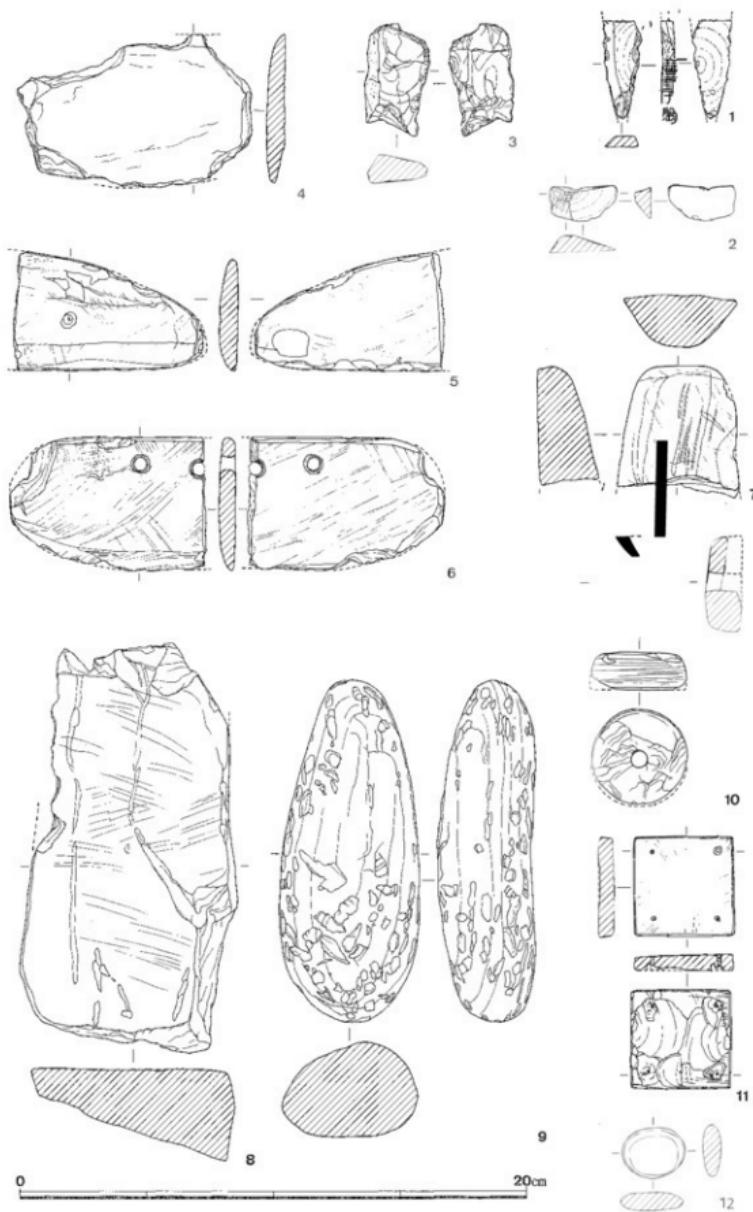
第22図 本製品実測図－2 (14・15=1/4、16~22=1/10)



第23図 木製品実測図-3 (23~32=1/4、33~37=1/10)



第24図 木製品実測図－4 (左の38部分=1/4、右の38~40=1/10)



第25図 石器・石製品実測図 (1/2)

5まとめ

今回の調査地が、今里車塚古墳前方部北側周濠の位置に当たるこどから、南部から大量の埴輪が出土したほか、当古墳の特徴といえる笠形木製品や、葺石の崩落が確認できた。埴輪では、当地域で3例目になる盾形埴輪の破片が出土し、ま

付表2 黒色土器・須恵器・灰釉陶器・鉢釉陶器・墨書き土器出土造構一覧

調査区	造構名	第8回 土層番号	第9回 黑色 土器 須恵器	第10回 須恵器	第11回 須恵器	第12回 須恵器	第13回 須恵器 鉢釉陶器	第14回 須恵器 上器
第1トレンチ	SX01 溝SD17 第6層 第7層 第8層 第9層 崩落葺石 第27層			4 14 18	1・10 2・3	37 19・21・32・34	10・20・32 4 14・21	1・7 4
第2トレンチ	溝SD12 柱穴D1 P20 第6層 第7層	1・3・4 6～8	3・5・7 16 13	1～3・7	4・6・9	10・36 1・3～9・13・15 ・17・18・20・24 ・26・28・29・30 ・31・38・39・41 ・47・49・52～56	28・33・41 5～8・9・13・15 18・24・25・27 ・29・30・34・38 ・40・45・48 49・51	3・6・8・9
	第8層	2・5	1・14	10～12・15・17	5・7・8	2・11・12・14・ 16・22・23・25・ 27・33・35・40・ 48・50・51・57	1～3・11・12・ 16・17・19・22・ 23・31・35・37 ・42・44・46・ 47・50・52	2・5
	第9層 第26層 第27層	2・8・10・12 9・11・15・17 4	5・6・13・16・19 9 9					

た当地域では4例目の準構造船を表現している

と考えられる線刻絵画のあるものなど、珍しいものが含まれていた。また、埴輪の出土量が、北部で少ないとから、周濠の外側には、埴輪列がなかったと考えられる。さらに、周濠より北に木棺墓と考えられる長方形掘形をもつ造構を検出した。この墓壙は周濠外郭線と同方向に長軸をもつことから、陪葬墓と考えられる。前方部の葺石崩落時期は、石の間に挟まるように

して出土した土器から、長岡京廃都後、さほど時期を経ていない段階と考えられる。前方部の北辺に沿って長岡京期の溝SD17が存在することから、この時期には大規模な葺石崩落は起こっていない。この溝を埋め尽くした砂礫堆積を覆うように葺石崩落層があり、葺石崩落層には9世紀以後の遺物が含まれていないことからも立証できる。またくびれ部から約16mの範囲にわたって葺石崩落が認められ、それ以上の前方部の存在が推定できるようになった。

崩落した前方部の葺石は、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏の分析によると次のとおりである。(1)、すべて丹波層群のもので、岩石種は砂岩52.3%、チャート39.6%、緑色岩類3.6%、玢岩1.8%、珪質頁岩・ホルンフェルス・脈石英が各々0.9%の7種ある。(2)、3軸の単純平均径から、葺石の根石及び作業区分単位石に相当するものが多い。(3)、無作意に採取された111個の前方部崩落葺石は、(1)の礫種組成・(2)の円磨度がやや低いことなどから、後円部と同様に、善峰川の中～下流部の河床礫を用いていると考えられる。

古墳周濠は、飛鳥時代から次第に埋まり始めているが、平安時代の10世紀頃まではくほんだ状態で、5～6層前後の湿地状水平堆積がみられた。

付表3 木製品・石器・石製品出土造構一覧

調査区	造構名	第21回～第24回 木製品	第25回 石器 石製品
第1トレンチ	溝SD17 第6層 第25層 第26層 崩落葺石 第22層	4 14・15 5・16・19・20・21・25・27・28・30・36 6～8・18・26・35 17	5 2・9・12
第2トレンチ	溝SD12 第6層 第7層 第8層 第22層 第23層 第24層 第25層 第26層 第27層 第28層 第29層	33・37 1・2・10・12・34 3・9・11・13・22・23・24・31・32・40 38 39	10 1 4・8・11 3 7 6

特に平安時代の遺物

には、緑釉陶器が数多く含まれており、乙訓地域にあって特殊なあたり方を印象づけた。古墳周濠内堆積の第6～8層の平安時代遺物について、出土量の傾向を探ると、今里車塚古墳の周濠北半部では85.5%を占め、南部では14.5%と少ない。これは古墳周濠より北側

付表4 第6～8層出土土器類の構成

第1トレンド(破片数721点)								
土 師 器	楕・杯・皿 高杯・盤・鉢 甕・鍋・釜 その他	297点 7点 136点 30.7%	63.0% 1.6% 4.7%	443点 61.4%	緑釉陶器		24点 100%	24点 3.3%
					楕・杯・皿 甕・瓶 その他	灰釉陶器		
黒色土器	楕・杯・皿 甕・瓶 その他	12点 2点	85.7% 14.3%	14点 1.9%	3点 1点	75.0% 25.0%	4点 0.6%	
須 惠 器	楕・杯・皿 甕・瓶 甕・大型壺 甕・大型壺	42点 75点 5点 107点	17.9% 32.0% 2.1% 45.7%	234点 32.5%	輸入磁器	楕・杯・皿	2点 100%	0.3%
					土師器以外の供膳形態比(破片数69点)		須 惠 器	
					楕・杯・皿	42点	60.9%	
					緑釉陶器	楕・杯・皿	24点 34.8%	27点
					灰釉陶器	楕・杯・皿	3点 4.3%	39.1%

第2トレンド(破片数4258点)								
土 師 器	楕・杯・皿 高杯・盤・鉢 甕・鍋・釜 その他	990点 75点 947点 6点	49.0% 3.7% 46.9% 0.3%	2018点 47.4%	緑釉陶器		322点 98.8%	326点 7.7%
					楕・杯・皿 甕・瓶 その他	灰釉陶器		
黒色土器	楕・杯・皿 甕・瓶 その他	482点 53点	90.0% 1.0%	535点 12.6%	12点 19点	38.7% 61.3%	31点 0.7%	
須 惠 器	楕・杯・皿 甕・瓶 甕・大型壺 甕・大型壺	393点 69点 475点 6点	29.3% 29.6% 35.4% 0.4%	1340点 5.1% 31.5%	輸入磁器	楕・杯・皿	2点 100%	0.2%
					土師器以外の供膳形態比(破片数727点)		須 惠 器	
					楕・杯・皿	393点	54.1%	
					緑釉陶器	楕・杯・皿	322点 44.3%	334点
					灰釉陶器	楕・杯・皿	12点 1.7%	45.9%

での土地利用が主であったためと考えられる。また第8層から寛平大寶(890年初鋲、18年間鑄造)が出土し、この層が890年より古くならない。従って第8層出土遺物のうち、平安時代の遺物は9世紀末以後の年代が与えられる。また第7層は古墳周濠より北側の平坦地にまで広がる薄い礎層であり、この層を除去して平安時代の柱穴群が検出できることから、平安時代の諸施設の機能停止直後の堆積であろう。また両層から出土した土師器の供膳形態の径高指標と形態的特徴からは、平安京II中～新段階と考えられる。

さて平安時代堆積層の土器類の構成を付表4にまとめた。これを見てわかるように、緑釉陶器の占める割合が7%を占める。この数值は乙訓地域では大山崎町百々遺跡の8%に次ぎ、平安京内の調査例に劣らない高比率といえる。土師器以外の供膳形態比でも40%を超える。この特異性は、以前から指摘されている寛平法皇の行宮説や乙訓寺=仁和寺直末寺山城法皇寺説を有力にするものと言えよう。一方、灰釉陶器は全体の0.7%、土師器以外の供膳形態比では1.9%であり、極端に少ない。その分、緑釉素地形態の楕皿類が、土師器を除く供膳形態比で54.4%を占める。これは、東海系の緑釉陶器が少ないと絡んで、山城系緑釉陶器生産地に近い京外の遺跡であることに起因している消費実態である可能性がある。

注1) 岩崎誠「右京第582次調査概要」「長岡市報告書」第38冊 1998年

2) 岩崎誠「右京第582次調査略報」「長岡市センタ一年報」平成9年度 1999年

3) 岩崎誠「長岡京期の土師器裏形土器」「杉山信三先生米寿記念論集平安京歴史研究」 1993年

4) 畿淳一郎「煮炊具の生産と供給」古代の土器研究会「古代の土器」4 煮炊具(近畿編) 1996年

5) 岩崎誠「山城西部(乙訓)」古代の土器研究会「古代の土器」4 煮炊具(近畿編) 1996年

以下、古墳時代後期から平安時代までの土師器裏の形態分類は本書による。

6) 岩崎誠「右京第483次調査概報」「長岡市センタ一年報」平成6年度 1996年

第2章 長岡京跡右京第604次（7ANJKK-5地区）調査概要

——長岡京跡右京四条四坊十六町・長法寺七ツ塚古墳群1・2号墳——

1 はじめに

- 1 本報告は1998年5月19日～7月6日まで、長岡市長法寺北畠10-1、10-3～6において実施した長岡京跡右京第604次調査および長法寺七ツ塚古墳群第5次調査に関するものである。
- 2 本調査は、柳山中商事による住宅建設に伴って実施したものである。調査は敷地内に盛土を行うため、道路部分以外は地下造構への影響は少ないと見られるが、当地は長法寺七ツ塚古墳群の範囲内にあたることから、それらに関する資料を得る目的で、道路部分については原因者負担によりを行い、七ツ塚古墳関連については国庫補助事業において調査を行うこととなった。これらの総調査面積は563m²である。今回の報告は、この内の国庫補助事業として行った第1・2トレンチに関するものである。
- 現地調査は（財）長岡市埋蔵文化財センター木村泰彦が担当した。
- 3 調査実施にあたっては、近隣の方々には水道水の供給や写真撮影に関して数々のご援助・ご協力をいただいた。
- 4 調査期間中および調査後の整理段階においては池庄司淳、尾崎みづ樹、野村江美子を始め多くの方々の協力を得た。

- 5 本報告の執筆・編集は木村が行った。

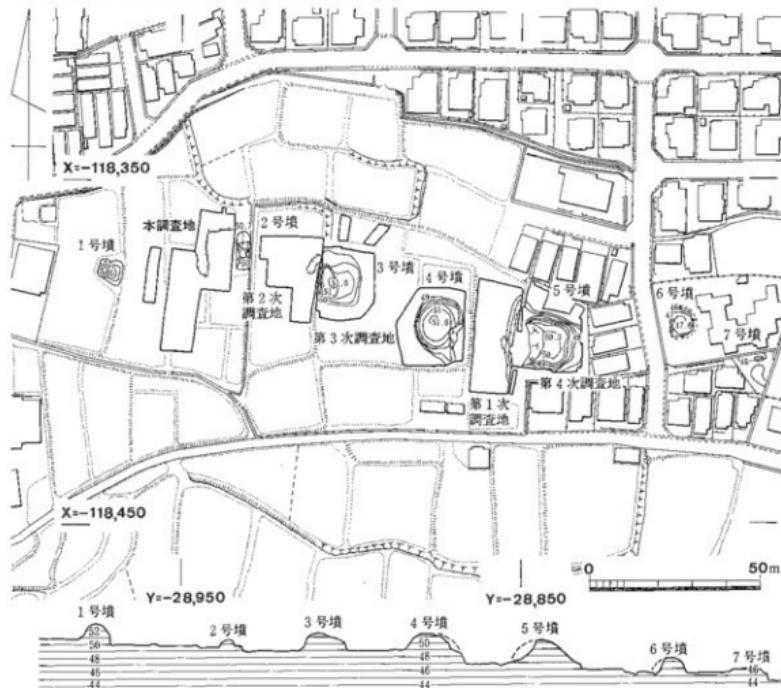


第26図 発掘調査位置図 (1/5000)

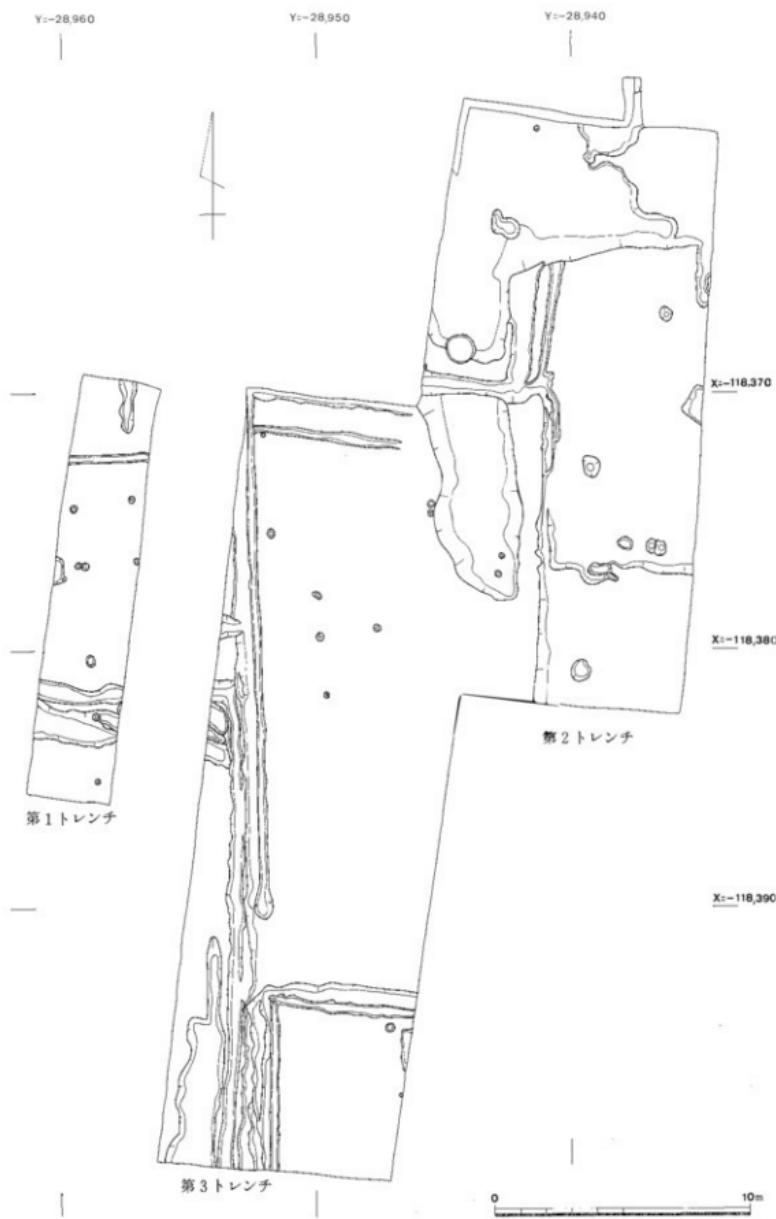
2 調査経過

今回の調査地は、長法寺の集落の東、西山山地の東麓に広がる扇状地上の西から東に延びる舌状の尾根筋に位置している。この尾根上、標高46~51mの間に7基の古墳が一列に並び、古くから七ツ塚と呼ばれていた。古墳群は西から東に順に1~7号墳と番号が付けられており、今回の調査地は、この内の1・2号墳の間に挟まれた水田にある。

七ツ塚古墳群に関する調査は、1967年の京都府教育委員会による測量調査が最初で、1932年に土取りにより破壊された7号墳の痕跡を含め1~6号墳の墳丘図が示された。^(注1)その後長岡市教育委員会・(財)長岡市埋蔵文化財センターにより5号墳の西側(七ツ塚古墳第1次調査)、⁽²⁾3号墳西側(第2次)、⁽³⁾3・4号墳の墳丘・主体部(第3次)、⁽⁴⁾5号墳墳丘(第4次)⁽⁵⁾の調査が行われ、3・5号墳が方墳、中央に位置する4号墳は帆立貝式古墳であることが明らかとなり、3・4号墳は、主体部の調査からいずれも6世紀中頃に築造された木棺直葬墳で、ひとつの古墳に複数の埋葬主体を持つことが判明した。また上記の調査成果から残りの1・2・6・7号墳について⁽⁶⁾も墳形は方墳と推定された。その後、5号墳は古墳公園として整備されたが、残念ながら3・4号墳に関しては完全に破壊されるに至った。

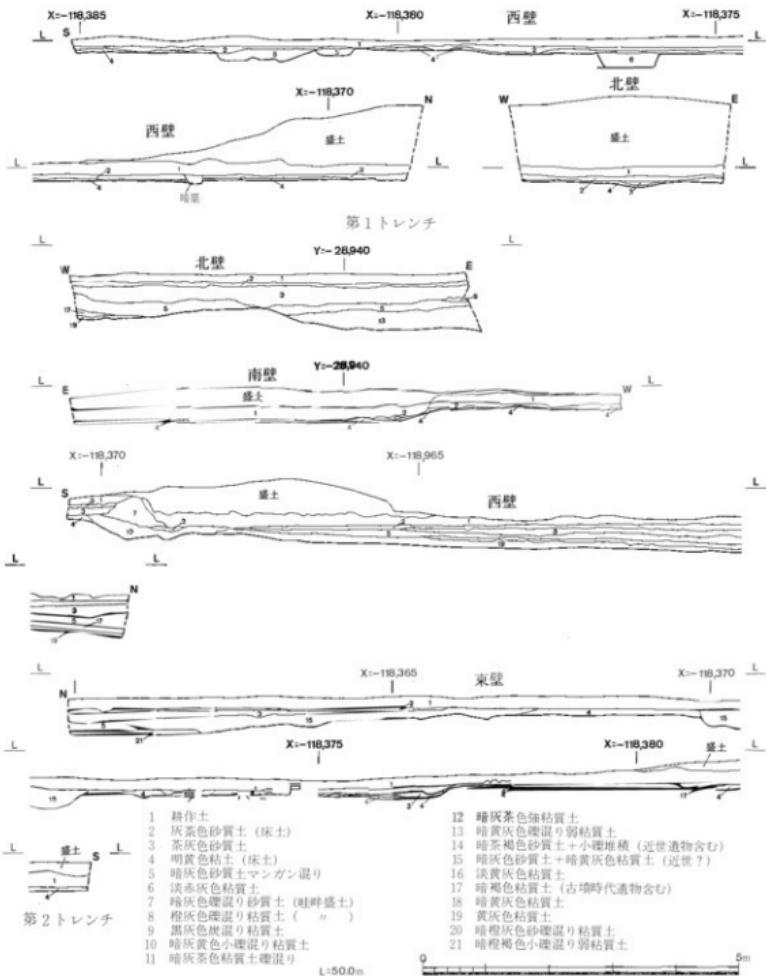


第27図 七ツ塚古墳群調査地位置図 (1/1500)



第28図 検出遺構図 (1/200)

調査地内には地形に沿って6枚の水田があり、最も西側の水田中央に、七ツ塚1号墳周溝の検出を目的として南北17m、東西3mの第1トレンチ、北東側の3枚の水田部分に、七ツ塚2号墳の周溝検出を目的として南北16m、東西3mの第2トレンチを設定、これらを国庫補助事業として行い、残る第3トレンチは調査地中央2枚の水田に南北30m、東西10mで設定し、原因者負担として行った。調査中第2トレンチにおいて七ツ塚2号墳の周溝を検出したため、北・南・西側に拡張を行った。なお原因者負担の第3トレンチの調査については別途報告を行うものである。



第29図 調査地土層図 (1/80)

3 検出遺構

第1トレント

七ツ塚1号墳の東側周溝の検出を目的に、墳丘の東側の一段低い水田に設定した。1号墳は七ツ塚古墳群の最西端に位置し、周囲を削平されているため台形を呈している。現状では西辺が約5m、東辺が約10m、南北辺が約8m、高さ約1.3m程の規模が残されている。地元の人の話によると、昭和の初め頃に竹藪の土取り時に削平されたとのことである。

トレントの層序は、北側に造成時の盛土が約1mほどあり、約0.2mの水田耕作土（第1層）の下に約0.06mの灰茶色砂質土（第2層）と0.04mの明黄色粘土の床土（第4層）があり、北側で溝状に深くなる部分では、2・4層の間に薄く茶灰色砂質土（第3層）が堆積している。これらを除去すると明黄色～明橙灰色の粘質土を基本とする地山に至り、この面で暗渠およびピット・土坑を検出した。水田面の標高は50.1m、地山面での標高は49.8mである。暗渠のうちトレント北側にある東西方向のものは樹脂製の管を入れた現代のもので、南側にある東西方向の2条のものは近世頃とみられるものである。いずれも東側の一段低い水田部分で途切れている。南側の暗渠は幅約0.7～1.5m、深さは0.1～0.2mで、埋土は暗灰色砂質土マンガン混り（第5層）である。遺物は少量の近世染付陶磁器が出土しており、江戸時代頃のものとみられる。

ピットは直徑約0.3～0.4m、深さ0.1m前後の小さなもので、8基検出された。いずれも、ほぼ直線的に並んでいるが柱穴は確認できなかった。各ピットとも遺物は出土していないため時期は不明であるが、埋土は暗渠と同一であり、江戸時代のものとみられる。

土坑はトレントの西端で部分的に検出されたもので、方形ないし長方形を呈するとみられる。南北1.1m、深さ0.2mを測り、埋土は淡赤灰色粘質土で遺物はまったく出土していない。おそらくは水田耕作に関連する水溜めと考えられる。

以上のように第1トレントでは、七ツ塚1号墳に関する遺構はまったく検出されなかった。これは西から東に傾斜している尾根上を水田開墾時に水平に掘削したためとみられ、実際1号墳の墳丘の一部が残る西側の水田とは約1mの段差がみられる。これまでの調査においても古墳築造時の旧地表面よりもかなり削平されていることが判明しており、古墳の東側に関しては遺構の遺存状況は非常に悪いものとみられる。

第2トレント

七ツ塚2号墳の西側周溝検出を目的として墳丘の西側に設定した。遺構の検出に伴って隨時拡張を行い、最終的に第3トレントと連結する形となった。2号墳は七ツ塚古墳群の中で最も削平が著しく、現状では南北約8m、東西約4m、高さ約1mの高まりが残されているのみである。遺物としては、これまでに墳丘上で須恵器の甕体部片が採集されているのみで、築造時期などに関する明確な資料は知られていない。

トレント内の層序は基本的には第1トレントとほぼ同一で、約0.2mの水田耕作土（第1層）、約0.06mの灰茶色砂質土（第2層）と0.04mの明黄色粘土の床土（第4層）であるが、東南側の

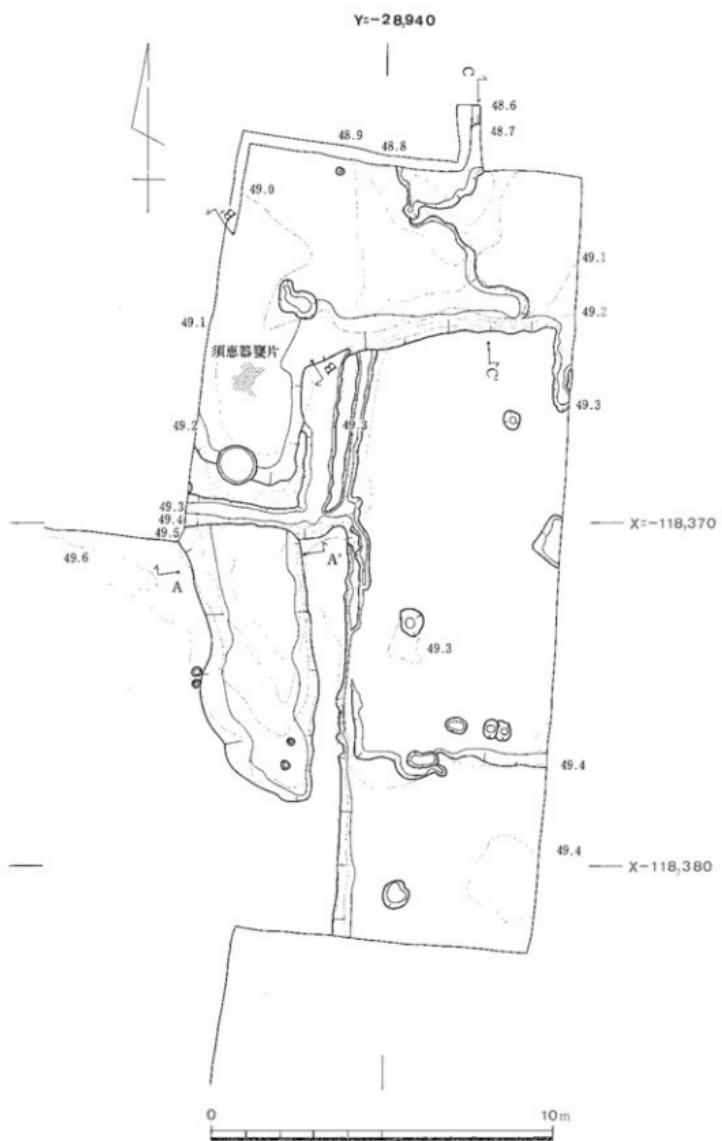
水田では第2・3層は認められず、西および北側の水田には第1トレンチでは部分的に認められた茶灰色砂質土（第3層）が水平に堆積している。特に北側の周溝上面部分では約0.3mの厚さで認められる。また3枚の水田にまたがって設定しているために段差があり、畦畔部分には暗灰色礫混り砂質土（第7層）、橙灰色礫混り粘質土（第8層）が盛られている。これらを除去すると第1トレンチと同様に地山面が検出されると共に、トレンチの北西部で、七ツ塚2号墳の北・西側の周溝を検出した。検出面の標高は、上述のごとく水田耕作による削平により段差があり、西側で49.6m、南東部で49.4m、北東部で49.3mである。古墳周溝以外の遺構としては、水田耕作に伴う暗渠、水溜状落ち込み、小ピット等があり、その他に畦畔沿いに掘られた溝、漆喰を貼った円形の現代の水溜、電柱状の柱の基礎等がある。

暗渠はトレンチ北東隅で検出された南北方向のもので、七ツ塚2号墳周溝を切って北側の谷部に延びており、南は浅くなっている。埋土は暗灰色砂質土マンガン混り（第5層）で、幅約0.2~0.3m、深さは0.1~0.2mである。近世陶磁器と瓦器の小片が出土している。水溜め状遺構はトレンチ東辺で部分的に検出された、平面方形ないし長方形を呈するとみられるもので、第1トレンチで検出されたものと同様の形態を有する。北辺は1.2m、深さは0.2mで、埋土は淡赤灰色粘質土（第6層）である。遺物の出土はみられない。

ピットは、七ツ塚2号墳西側周溝付近にみられる小さなものと、東側の一回り大きなものがあり、小ピットは、直径0.2~0.3m前後、深さ0.2m前後で1トレンチにおいて確認されたものと埋土も共通する。遺物は出土していないが、近世頃のものとみられる。東側のピットは平面円形ないし不整円形を呈するもので、直径0.4~0.8m、深さ0.1~0.5mを測る。いずれも柱穴等は確認できず遺物も出土していないが、埋土などからこれも近世以降のものと考えられる。

七ツ塚2号墳周溝 第2トレンチの北西部および第3トレンチの北東隅で検出された、七ツ塚2号墳の西側及び北側の周溝で、平面の形状から方墳であることが明らかとなった。西側の周溝は北に向かって徐々に緩やかに傾斜しており、水田の段差によって一端途切れ、再び北側に深くなっている。幅は、水田の上段部分で約3m、深さ0.25mを測り、それより北では西側の肩が調査地外に延びるため幅は確認できない。北側では削平により浅くなっている深さは0.2mである。埋土は最上層に淡黄灰色粘質土（第16層）があるが、これは水田上段部分のみにみられる。その下には暗褐色粘質土（第17層）、暗黄灰色粘質土（第18層）、黄灰色粘質土（第19層）の順で厚さ0.1m程の薄い堆積層がみられる。このうち西側周溝北半、墳丘北西隅付近の第17層からは、須恵器壺片が集中して出土している。状況的には、墳丘上から転落して破損したものとみられるが、いずれの破片も細かく割れており、あるいは古墳の墳丘削平時に投棄されたものとも考えられる。また周囲からは須恵器平瓶や土師器壺の破片も出土している。この付近以外には第17層からは、ほとんど遺物は検出されていない。また、それより上の第16層からは少量の土師器小片が出土したのみで、それ以下の第18・19層からは遺物は出土していない。

北側の周溝は南側に明瞭な肩を有するが、北側には立ち上がりがなく、そのまま谷部に向かって広がる。これらを追求するため、北にサブトレンチを入れて確認を行ったが、水田開墾時に削

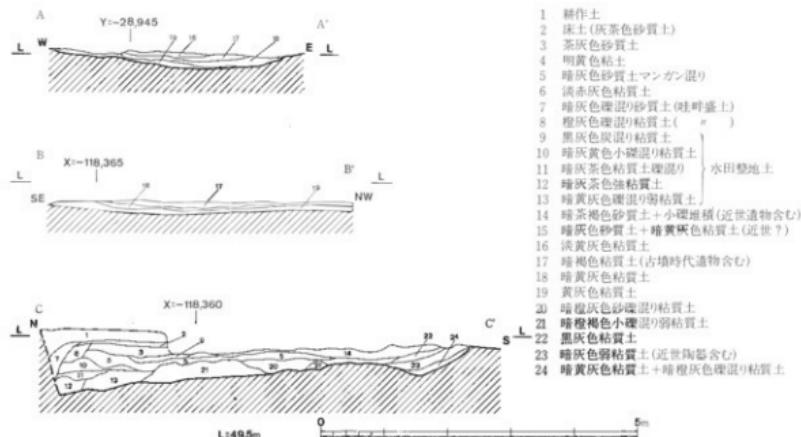


第30図 七ツ塚 2号墳周溝実測図 (1/150)

平を受けており、急激に落ち込んでいる。これまでの七ツ塚3・4号墳の調査でも周溝は谷側では立ち上がりが確認されておらず、尾根筋部分のみに周溝をめぐらせ、他は平坦部に削りだしていたと考えられる。深さは東側で0.2m、中央付近では一段深くなり0.3~0.4mである。埋土は、西側埴丘北西隅付近では第18層がみられず、第17・19層が薄く堆積しその上に第5層が堆積している。しかし中央より東側ではかなり異なり、これらの堆積はまったくみられない。最上層では暗茶褐色砂質土をベースとして拳大の礫が多数検出されている(第14層)。これには染付陶磁器片を少量含んでおり、近世以降の堆積である。礫群は検出当初七ツ塚2号墳に関連する遺構かとも思われたが、堆積状況および出土遺物から水田開墾時における埋立土と推定された。また以下の堆積土でも埴丘裾付近に堆積している暗灰色弱粘質土(第23層)から近世陶器が出土するなど、かなり後世の搅乱を受けている。北側周溝の中央部付近は周溝よりも一段深くなっている。それより北側の谷部に向かっての堆積は、先述したごとく削平を受けており、一段低い水田畦畔の堆積土となっている。この他に、周溝内および埴丘裾部には特別な遺構は無く、埴丘北西隅において深さ約5cmの浅い落ち込みを確認しているが、遺物などは無く古墳に伴う施設とはみられない。

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱にして2箱と調査面積に比して非常に少量であり、その大半は七ツ塚2号墳の周溝堆積土内からのもので占められる。それ以外のものは各トレンチとともに耕作土・床土出土のもので、若干ピットからも出土遺物がみられる。いずれも少量・小片で、図示できるものは極めてわずかである。近・現代以外では、近世のものが最も多く、陶磁器類、次いで古墳時代の須恵器、土師器、中世の瓦器、土師器などのほか、平安時代の縁釉陶器片もみら



第31図 七ツ塚2号墳周溝土層図(1/80)

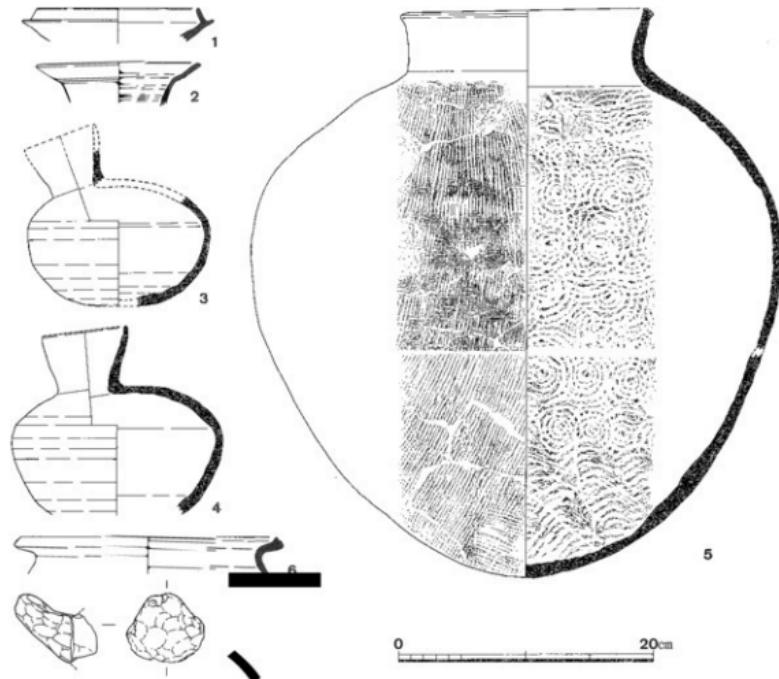
れる。これらのうち七ツ塚2号墳周溝内から出土した古墳時代のものについて述べておきたい。

1は須恵器杯身の小片で、口縁部のみが遺存する。口縁部は短く内傾して立ち上がり端部は丸味を帯びてわずかに沈線状に凹ませている。受部は外方に広がり、端部は丸く納めている。体部のヘラケズリは残された破片からは確認できない。口縁部径12.8cm、受部径15.0cmを測る。陶邑編年におけるTK209型式に相当する。

2は須恵器甌の口縁部片で、屈曲して段を作り大きく外上方に広がる。屈曲部には2条の沈線を巡らせ、端部は外傾する平坦面を成す。内外面ロクロナデで、外面には波状文などの施文はみられない。口縁部径13.0cmを測る。

3・4は須恵器の平瓶である。ともに扁球形の体部に外上方に開く口縁部を持ち、3は全体をヘラケズリしたのち上面をナデ調整しており、口縁部内面と体部上面に薄く自然釉がかかる。体部最大径14.3cmを測る。4は底部を欠失するが上部は比較的良く残っており、口縁部径6.9cm、体部最大径16.5cmを測る。体部はヘラケズリの後、上部のみナデを施す。体部上面は円形の粘土で塞ぎ、内面に絞り跡が残る。口縁部内面および体部上面に自然釉がかかっている。

5は須恵器の甌で、短く立ち上がる口縁部と無花果形の胴部からなる。口縁部はほぼ直線的に立ち上がり、端部は内外にわずかに肥厚させて外傾面を作る。内外面ともにヨコナデ調整。体部



第32図 七ツ塚2号墳周溝出土遺物実測図 (1/4)

は外面縦方向の平行タタキ、内面は深い同心円の当て具痕が残る。このうち内面の同心円の当て具痕は底部付近のみ同心円がやや大きく、これは底部を球形に成形する段階で工具が異なっていることを示す。口縁部径19.7cm、器高44.3cm、胴部径41.3cmを測る。

6は土師器甕で、口縁部は外方に大きく屈曲し、端部は肥厚させて上方に突出する。体部外面にはわずかに縦方向のハケメが残されている。口縁部径21.2cmを測る。

7は土師器の甕あるいはカマドの把手とみられるものである。平面は三角形を呈し、上部に反りあがる。全面指捺えで調整しており、体部に挿入されていた凸部が残っている。

5 まとめ

今回の調査においては、第1トレーナーでは削平により1号墳に関する確実な知見は得られなかった。七ツ塚古墳群では、破壊された古墳や未調査の古墳でも採集品などが残されている場合があるが、1号墳については現在のところまったく知られておらず、不明な点が多い。

一方、第2トレーナーにおいては、ほぼ当初の目的どおり七ツ塚2号墳の周溝を検出し、正確な規模については明らかにはできなかったもののこれまでの推定どおり方墳であることが明らかとなった。また削平を受けた時期についても、周溝出土の遺物から江戸時代頃と推定される。

冒頭にも述べたように七ツ塚古墳群は、中央の4号墳が帆立貝式であり、東西に存在する3基づつ6基の古墳のうち、今回の2号墳の調査成果を合わせると3・5号墳の3基が方墳であることが判明した。従って最も西にある1号墳と、現在駐車場に囲まれた6号墳、現在は失われている7号墳のいずれも方墳である可能性がさらに高まったものといえよう。2号墳の築造年代に関しては墳丘がほとんど失われているため内部主体に関する資料は得られないものの、周溝内からわずかではあるが手がかりとなりうる遺物が出土した。このうち須恵器の杯身は陶邑編年によるTK209型式に相当し、これまでの七ツ塚古墳群の主体部の調査で出土した須恵器が概ねTK10型式であることに比べ若干新しいものとなる。ただ周溝内の堆積土出土でもあり、また5号墳の周溝ではTK217型式の須恵器が出土していることから、これを築造年代の推定根拠とはし得ないであろう。5号墳では墓前祭祀が後の時代まで行われていた可能性が指摘されており、2号墳出土の須恵器についてもそれを考慮する必要があろう。従って現段階では築造年代に関して厳密には特定し得ない。このように残された課題は多くあるものの、七ツ塚古墳群に関する新たな事実を確認することができたのは、わずかながらも乙訓の古墳時代を知るうえでのひとつの成果といえよう。なお、2号墳は住宅に囲まれたものの、墳丘はそのまま残されている。

注1) 京都府教育委員会「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1968年

2) 原 秀樹他「長法寺七ツ塚古墳群第1次調査概要」『長岡市報告書』第17冊 1986年

3) 山本輝雄「長法寺七ツ塚古墳群第2次調査概要」『長岡市報告書』第20冊 1988年

4) 山本輝雄「長法寺七ツ塚古墳群」『長岡市報告書』第21冊 1988年

5) 山本輝雄「右京第353次調査略報」『長岡市センター年報』平成2年度 1992年

6) 山本輝雄「長法寺七ツ塚古墳群」『長岡市史』資料編一 五 古墳時代 1991年

第3章 長岡京跡右京第626次（7ANGKM-1地区）調査概要

——長岡京跡右京二条四坊十三町・西四坊大路推定地——

1 はじめに

- 1 本報告は、1998年12月7日から1999年2月3日まで、長岡京市井ノ内鏡山7番地、今里回向場3番地において実施した長岡京跡右京二条四坊十三町と西四坊大路推定地の発掘調査に関するものである。調査面積は580m²である。調査の詳細については、図面整理と出土遺物の検討を行ったのち来年度に報告する。
- 2 本調査は、京都中央農業協同組合による大規模な開発計画に当たって、当地が長岡京跡をはじめ北平尾古墳群や回向場遺跡に隣接することから、埋蔵文化財の所在、範囲及び性格を明らかにするために実施した試掘調査である。
- 3 調査は、平成10年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター原秀樹が担当した。
- 4 調査の実施に当たり、土地所有者の小林茂一氏と斎藤登氏には種々のご協力とご理解を得た。
- 5 本報告の執筆および編集は原が行った。

2 調査概要

調査対象地は、約5千平方メートルの敷地があり現況は竹藪となっている。敷地は南北方向の



第33図 発掘調査位置図 (1/5000)

地境溝を挟んで西側は竹藪の土取りでできた崖面が残る起伏のある傾斜面となっており、東側は平坦な竹藪となっている。

調査地の周辺には、7世紀前半代の築造と考えられる陶棺を埋葬した北平尾古墳群と光明寺古墳群が分布するほか、周辺には古墳時代後期を中心とする古墳群が多く分布する。また、西方の丘陵尾根上の小平地には竹藪土入れ作業中に須恵器壺と銭貨が出土した回向場遺跡がある。

調査は、地境溝を挟んで東と西に調査区を設定した。東側は、東西37mの1トレンチとT字形に接続する南北13mの2トレンチを、西側は東西40mの3トレンチと、その周囲に方形の4~6トレンチを設定した。調査中、1トレンチと3トレンチの遺構を追究するため部分的な拡張を行った。

検出した遺構は、1トレンチ東端から溝と土坑、3トレンチから近代の暗渠排水溝と野っぽ、長岡京期の溝SD02がある。溝SD02は、西端で幅約3m、深さ約1mの緩やかに曲がる溝で、埋土はおおむね3つの層位に分かれ。特に中層は比較的大きな木材や枝葉、植物根などの有機物を含む腐植土層となっており、調査中は常に水が湧き湿った状態であった。長岡京期の土師器皿A、杯A、壺Cなどのはかミニチュア竈が出土している。この他、古墳時代後期の須恵器平瓶、甕、平安時代前期の須恵器、鎌倉時代の瓦器、白磁などがある。

今回の調査では、長岡京右京域の西限と想定されるところから大規模な溝を検出したことは予想外の成果であった。これまで西方の丘陵地は蔵骨器の出土から墳墓地であった可能性が指摘されていたが、これに加えて新たな長岡京期の遺構の存在が濃厚となった。また、平安時代前期および鎌倉時代の遺物は、溝の埋没後も周辺で土地利用が行われたことを物語るものとして注目される。



第34図 1トレンチ全景（東から）

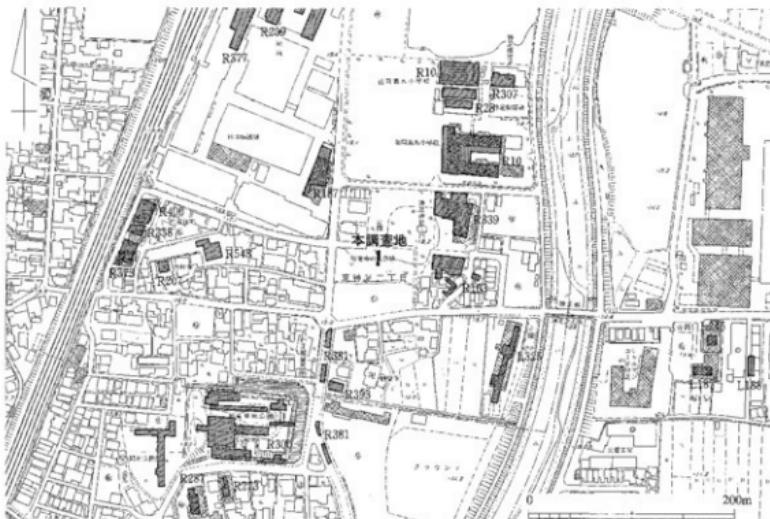


第35図 溝SD02検出状況（西から）

第4章 長岡京跡右京第631次（7ANMKI-6地区）調査概要 ——長岡京跡右京七条一坊二町、神足遺跡、神足城跡、勝龍寺城跡——

1 はじめに

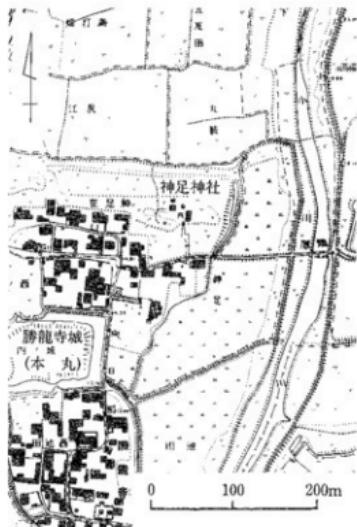
- 1 本報告は、1999年2月1日から3月12日まで、長岡京市東神足二丁目7において実施した長岡京跡右京七条一坊二町および神足遺跡、神足城跡、勝龍寺城跡の発掘調査に関するものである。調査面積は84m²である。
- 2 本調査は、遺跡範囲確認調査として、室町時代の神足城跡、室町時代から桃山時代にかけての勝龍寺城跡の資料を得ることを主な目的に実施した。
- 3 調査は、平成10年度国庫補助事業として、長岡京市教育委員会が主体となり、財團法人長岡市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター原秀樹が担当した。
- 4 調査の実施に当たり、土地所有者の神足久子氏をはじめ、神足神社、神足美幸、濱村百世両氏の近隣土地所有者、神足治夫氏、神足自治会など地元の方々には種々のご協力とご理解を得た。
- 5 本報告の執筆は長岡京市教育委員会中尾秀正が行った。



第36図 発掘調査位置図 (1/5000)



第37図 神足神社周辺に残る土塁（1984年）



第38図 勝龍寺城付近の地形（1922年）

2 調査概要

調査地は、JR長岡京駅の南東約400mにあり、南流する小畠川の右岸にある神足神社の南に位置する（第36図）。現在竹林になっている当地は段丘上にあるが、すぐ南側に北部の段丘から氾濫平野への地形変換線が東西方向に走っている。

当地周辺には、長岡京跡をはじめ弥生時代、古墳時代の集落遺跡として著名な神足遺跡、室町時代の神足城跡、室町時代から桃山時代にかけての勝龍寺城跡などが所在している。とくに、神足城は中世の西岡地域を代表する国人である神足氏の城館であるが、16世紀前半に作成された「乙訓郡条里坪付図」（九条家文書）に「こうたにしろ」と記されている。その位置がちょうど当地付近にあたる。また、元亀2（1571）年に改修された細川藤孝在城期の勝龍寺城では、当時の様子を伝える「山城国西岡御領地之地図」（永青文庫）によると、当地付近が「神足屋舗」と比定でき、周辺に当時の土塁や空堀とみられる遺構が現存している。

今回の調査は、主に勝龍寺城の外郭施設である土塁や空堀の規模・構造を明らかにするとともに、神足城の範囲を確認し、遺跡保存に必要な資料を作成する目的で実施した。

調査は竹の伐採から始め、重機により表土、藪土を除去し、順次人力による掘削を行った。その結果、細川藤孝在城期に築造されたとみられる土塁と空堀を検出した。遺構は後世の改変のため、かなり崩壊していた。土塁の築造状況を調べるために、一部で断ち割りを行った後、調査区を埋め戻し、調査を終了した。なお、調査の詳細については時間の都合により次年度に報告する。

第5章 走田古墳群第3次・海印寺跡第4次（7CKPME-4地区）調査概要

1 はじめに

- 1 本報告は、1997年12月15日から1998年1月23日まで、京都府長岡京市奥海印寺明神前31において実施した走田古墳群第3次調査および海印寺跡第4次調査に関するものである。なお、本調査の概略については、平成9年度に『長岡京市文化財調査報告書』第38冊として公刊した。
- 2 本調査は、海印寺跡に関係する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。調査は対象地に3カ所の調査区を設けて行った。調査面積は約111m²であった。
- 3 発掘調査は、平成9年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は、同センター中島皆夫が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、寂照院住職である佐藤俊順氏に種々のご協力を賜った。
- 5 調査後の図面・遺物整理は、船戸裕子、佐藤陽子をはじめ多くの方々の協力を得た。
- 6 本報告の執筆・編集は中島が行った。

2 調査経過

調査は阪急長岡天神駅の西方約1.5km、奥海印寺明神前31に所在する寂照院の敷地内で実施した。周辺は田畠、竹藪がかなり残っているが、近年の宅地化によってその景観も変わりつつある。

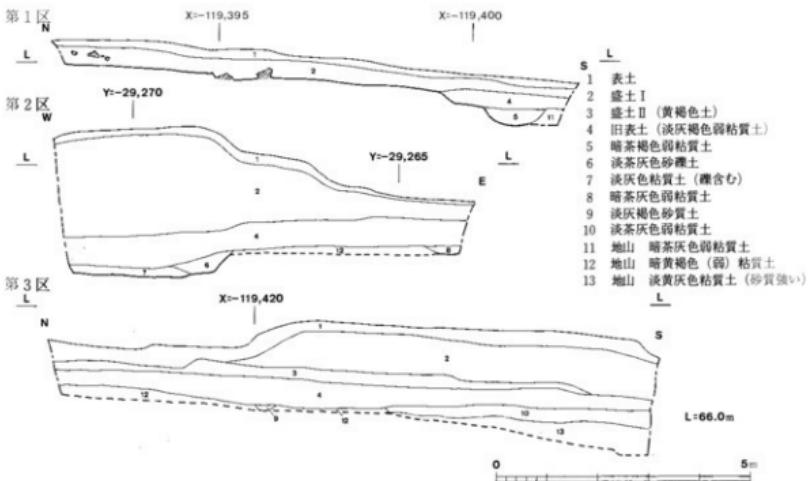


第39図 発掘調査地位置図 (1/5000)

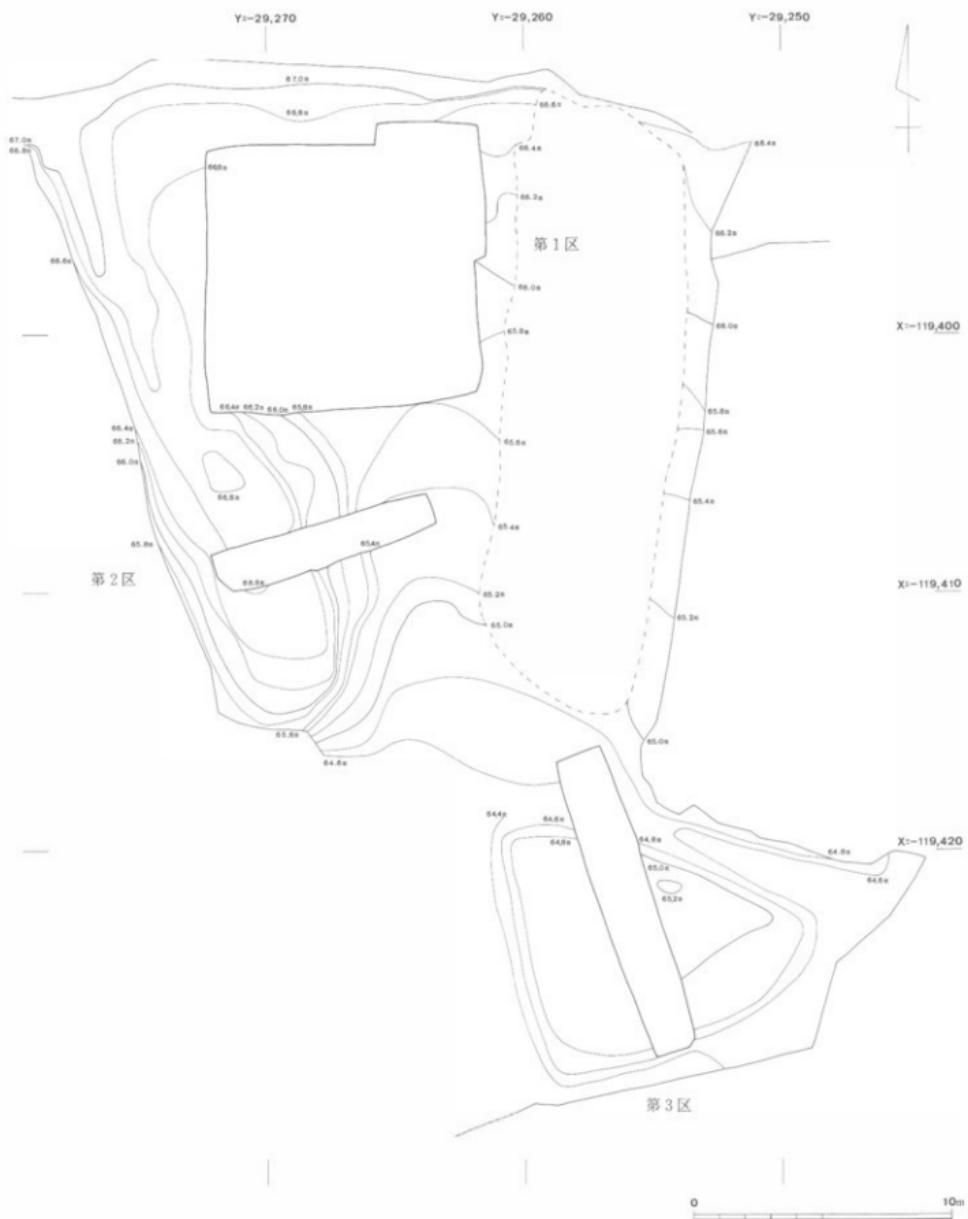
寂照院は、平安時代前期に創建されたと伝える海印寺の子院といわれるが、現在では江戸時代末期以降の建造物を残すにすぎない。海印寺に関する考古学的調査は、これまで3次にわたって行われている。このうち、第2次調査では13世紀から14世紀前半の井戸、土坑、溝などを検出し、中世海印寺の一端を示す成果が得られた。^(注1) 第3次調査は寂照院の本堂新築工事にともなう調査で、ここでは海印寺と関連する成果は得られなかつたが、⁽²⁾ 江戸時代の座棺墓、古墳時代後期の横穴式石室2基（走田8・9号墳）、陶棺などを確認している。なお、走田9号墳の石室は寂照院の協力などにより、原位置での保存および展示公開が行われている。

調査地は標高64～67mほどの南斜面で、丘陵地から南東方向へ延びる尾根筋の先端部にあたり、前述の海印寺跡第3次調査地と同様な地形上に位置している。調査地の周囲は南側以外に高さが1m前後の崖面が形成されていた。竹および灌木伐採後の地形は、全体として北から南へ緩やかに傾斜していたが、北側に比較的平坦な部分が、西側と南側には土壇状の高まりが認められた。表面観察では他に地形的な特徴を持つ部分や遺物の露出が認められなかつたため、調査区は平坦面、土壇状部の性格解明を目的として設定した（第41図）。第1区は平坦部の正方形に近い区画、第2区は西土壇状部中央の東西に細長い区画、第3区は南土壇状部中央の南北に細長い区画で、各調査区の面積は順に約95m²、約7m²、約9m²を測る。調査は、まず重機によって表土、藪土、盛土を除去し、その後に人力による掘削を行つた。

各調査区の堆積状況は第40図に示すとおりで、第2・3区の土壇状の高まりについては戦後施された盛土（第2・3層）であることが分かった。また、いずれの調査区でも盛土の下には旧表土（第4層）が遺存すること、また、第1区の北半では旧表土および地山層が大きく削平を受けたことが明らかとなつた。



第40図 調査区土層図 (1/100)

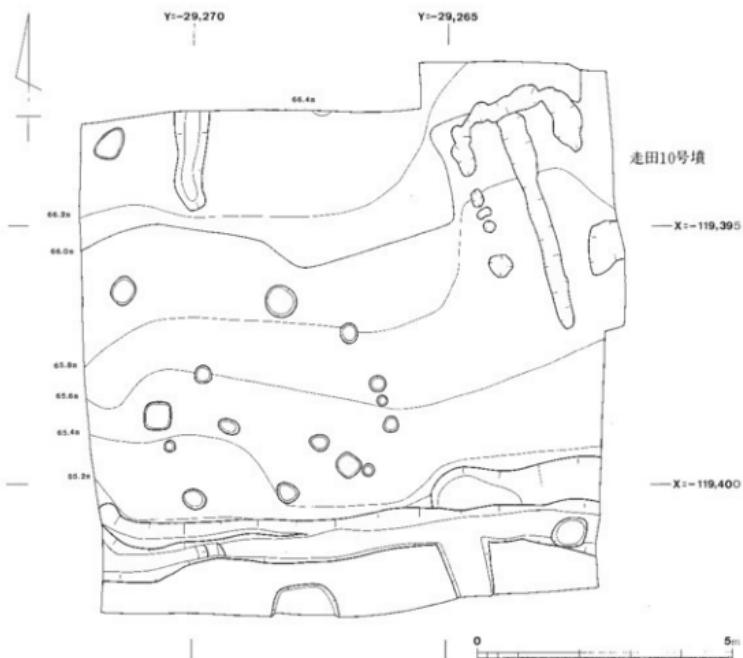


第41図 調査区配置図 (1/200)

3 検出遺構

第1区 第1区は最も北に設定した調査区で、地表面の標高が65.6~66.7mの範囲に位置している。調査区の北部では地表面より0.4m下で比較的緩やかな傾斜の地山面が確認されたが、南辺部では地表面より0.7m下に旧表土が認められ、さらに東西方向の溝が掘削されていた。溝は深さが0.4m程度で、埋土には近現代の遺物が含まれていた。溝より北側に旧表土が認められないことから、調査地の地形を現在の状況に造成する際に、第1区の北部は旧表土、地山層が少なくとも1m程度にわたって削られたものと考えられる。

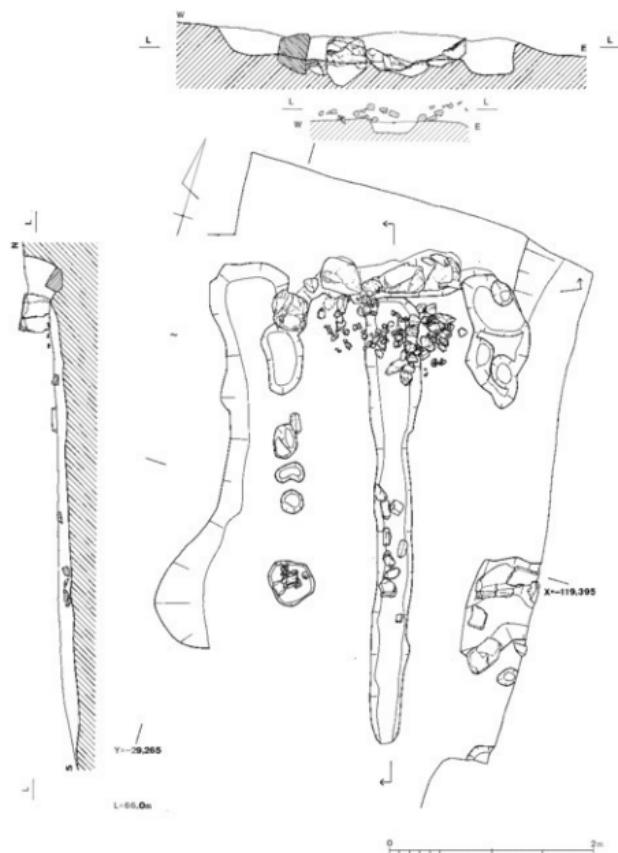
第1区北部の緩傾斜面では、溝1条、柱穴17基とともに横穴式石室を埋葬施設とする古墳を検出した(第42図)。南北方向の溝は、幅0.6m前後、深さ0.2mを測る。溝からは遺物が出土しておらず、時期については判然としない。柱穴は円形のものが主体であるが、建物として並びを認識できるものがなかった。直径が0.1~0.5m、深さは0.3m前後を測り、一部の柱穴からは江戸時代後期頃の遺物が出土している。第1区北東部で確認した古墳は、走田古墳群に含まれることが明らかであり、以下の記述では走田10号墳と呼称する。



第42図 第1区検出遺構図 (1/100)

走田10号墳は第1区の北東部に築造されていた古墳で、墳丘が完全に失われた状態で検出された。前述のように、調査地の北辺部は土地の変更を最も受けた場所と考えられ、旧表土、地山層が大きく削られている。このため、調査前の表面観察では石材の露出や等高線の乱れなど、古墳の存在を想定させる情報は全く得られていなかった。

埋葬施設は南南東に開口する横穴式石室であるが、遺存状況が悪く、石材は奥壁周辺の基底石しか残っていない。しかし、石室の中軸線上では排水溝を確認することができ、玄室側壁に相当する部分では石材の抜き取り跡も確認している(第43図)。石室の形態や構造、そして規模などの詳細は不明であるが、遺存する石材や石材の抜き取り穴、排水溝より推察すれば、平面形態は長方形で、主軸の方位がN-15°-Wにとる全長4.3m以上、奥壁部分での幅が約1.5mの石室であつ



第43図 走田10号墳実測図 (1/50)

たと考えられる。袖の有無は不明であるが、石室の規模を考慮すれば、片袖式ないし両袖式と考えられる。横穴式石室の石材は、原位置をとどめるものが奥壁2石と西側壁1石の基底石で、粘板岩、緑色岩を使用していた。

奥壁周辺の床面には長軸が10cm程度の角礫が散乱しており、本来は礫床として石室の全面に敷かれていたものと考えられる。最も遺存状態の良い奥壁周辺の高さは、礫床の上面で標高約66mで、基底面は礫床の上面より0.1m程度下にある。礫床下の基底面には排水溝が施されていた。排水溝は玄室の奥壁直前から始まり、ほぼ直線的に延びている。断面の形態は逆台形で、幅が0.4m前後、深さ約0.1mを測る。排水溝の底面は奥壁の直前が最も高く、検出し得た南端部の底面に比べて0.2m程度の比高を持っていた。

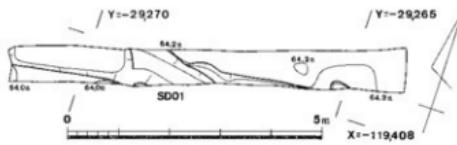
10号墳から出土した遺物は非常に少なく、表土や竹藪客土から出土したものもない。横穴式石室からは須恵器数点が出土しているが、原位置を保つものはない。また、玄室の北西隅では古墳時代の須恵器高杯とともに長岡京期から平安時代の土師器皿が出土している。

第2区 第2区は調査地西側の土壇状の高まりに設定した調査区である。土壇状の高まりは盛土を最大2m程度の高さまで積み上げて築かれている。盛土は第1区周辺の削平によって生じた土砂と考えられ、盛土下の旧表土に含まれる遺物が昭和期より新しいものであることから、土壇状の高まりも近年の土地改変にともなって築かれたことが明らかとなつた。地山は第1区の南辺部と同様に旧表土の直下から確認された。

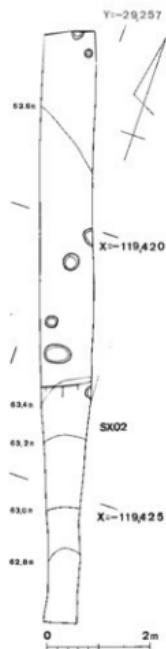
地表面ではほぼ東西方向の溝1条、柱穴1基を検出した(第44図)。溝SD01は調査区の西半にあり、幅1m前後で、深さが約0.3mを測る。埋土からは近現代の遺物とともに近世の土師器、砥石などが出土した。柱穴には遺物が含まれていなかつた。

第3区 第3区は調査地南側の土壇状の高まりに設定した調査区である。第3区の土壇状の高まりも厚さが1m程度の盛土によって築かれており、第2区のものと同時期に築かれたと考えられる。第2区の堆積状況と同様に、第3区でも旧表土の直下で地山が確認できた。

第3区の地表面では落ち込みと柱穴7基を確認した(第45図)。落ち込みSX02は調査区の中央付近から南へ緩やかに傾斜しており、埋土からは僅かに土師器、瓦器の破片が出土している。柱穴からは遺物が出土しておらず時期は分からず。



第44図 第2区検出遺構図(1/100)



第45図 第3区検出遺構図(1/100)

4 出土遺物

本調査では土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、瓦などが整理箱にして2箱出土した。しかし、出土遺物の大部分は近世以降のものであり、走田古墳群、海印寺跡に関連する遺物は非常に少ない。

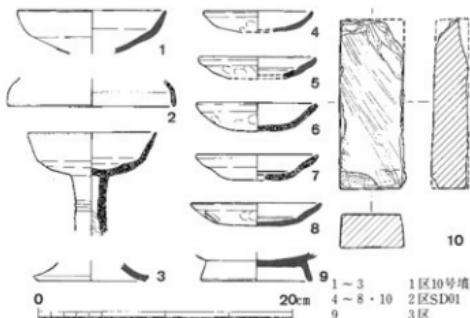
走田10号墳の遺物（第46図1～3） 1は土師器の椀と考えられるもので、口径11.6cmを測る。胎土には砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色を呈する。2は須恵器の杯蓋と考えられる破片で、口径が13cm前後に復元できる。3は須恵器の高杯で、杯部はほぼ完全に残っていた。1～3は横穴式石室内の遺物で、とくに3は奥壁近くの床面から出土した。以上のように、走田10号墳から出土した遺物は少なく、所属時期の明確なものもない。このほか、横穴式石室からは長岡京期から平安時代頃の土師器片が数点出土している。

第1区の遺物 第1区では前述の走田10号墳のほか、柱穴、溝から近世頃の土師器、須恵器、瓦が出土した。しかし、いずれも細片であったため図示していない。

第2区の遺物（第46図4～8・10） 構SD01からは近現代の遺物とともに近世前半の遺物が出土した。4～8は土師器の皿で口径が8.6～10.3cm、器高1.8～2.3cmを測るもので、17世紀中頃の

時期が想定できる。いずれも、淡黄灰褐色の色調を呈し、硬質に焼かれている。10は粘板岩製の砥石で残存長は約13cmを測る。使用痕跡は片面にだけ確認できた。

第3区の遺物（第46図9） 落ち込みSX02から土師器、瓦器が出土したが、細片であったため図示できなかった。9は陶磁器の椀高台部で、高台径は約9cmを測る。第3区の掘り下げ中に出土した。



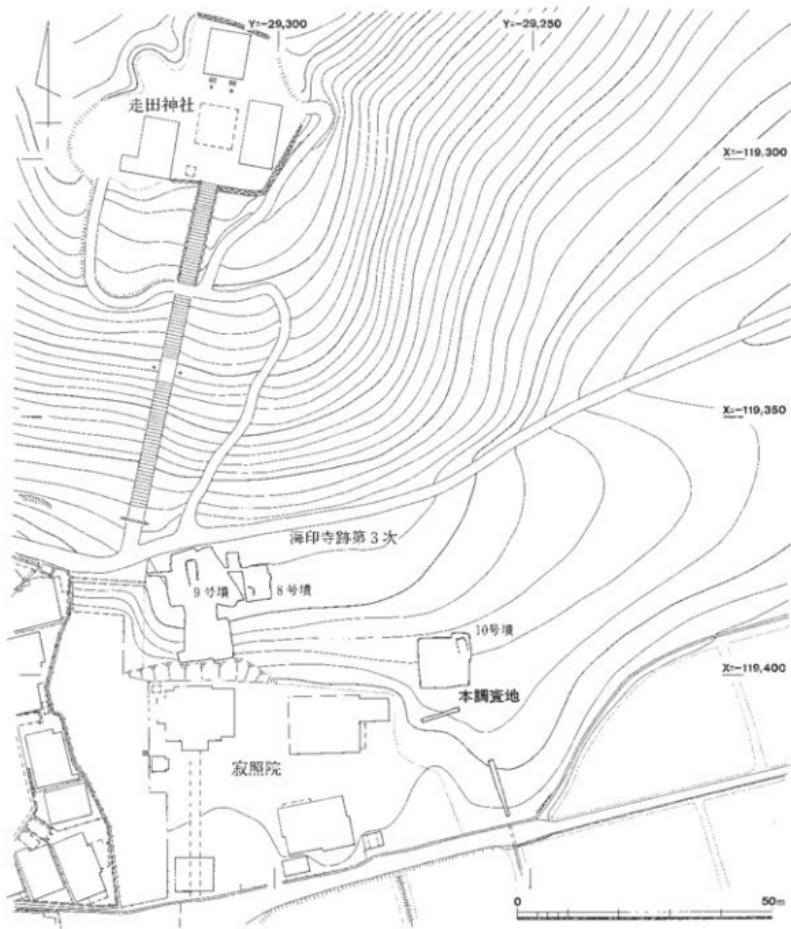
第46図 出土遺物実測図（1/4）

5 まとめ

本調査では、当初の目的であった海印寺に関する成果が得られなかった。しかし、第1区では横穴式石室を埋葬施設とする走田10号墳を検出し、走田古墳群について新たな資料を加えることができた。以下、走田10号墳に関する若干の検討を行い、まとめに変えたい。

走田古墳群は走田神社、寂照院が立地する丘陵地の南斜面に所在し、かつて7基ほどの古墳が存在したといわれる。しかし、5号墳出土の陶棺、寂照院境内に置かれていた（現在は長岡京市埋蔵文化財センターで保管）家形石棺の棺材以外は、未調査のまま破壊されたために内容が明らかでなかった。1995年の海印寺跡第3次調査で8・9号墳と陶棺が新たに確認されたことにより、走田古墳群は横穴式石室を主体とし、石棺を持つ古墳が群中に存在することも明らかとなった。

今回の調査で確認した走田10号墳は、第3次調査の8・9号墳から南東方向へ約50mの地点に位置する。8～10号墳の横穴式石室は石室床面の高さで比較すれば、8号墳の69.5m、9号墳の70.7mに対して、10号墳は65.8mと8・9号墳より4～5m程度低い位置にある。また、横穴式石室の主軸は10号墳がN15°Wで、8号墳のN8°49'E、9号墳のN5°21'Wに近い数値が得られない。古墳の位置関係や主軸の方向を考慮すれば、8・9号墳と10号墳は異なった支群に属するものと推定される。このことから、走田古墳群に関しては複数の支群を持つ比較的規模の大きな古墳群と再評価する必要があるだろう。



第47図 調査地周辺地形図 (1/1000)

付表5 走田古墳群の横穴式石室一覧表

	形態	全長	玄室長	玄室幅	主軸の方位	床面の高さ	蝶床の有無	排水溝の有無
8号墳	不明	1.3m以上	不明	約1m	N8°49'E	69.5m	あり	なし
9号墳	両袖式	5.2m以上	3.05m	1.8m	N5°21'W	70.7m	あり	あり
10号墳	不明	4.3m以上	2.4m程度	1.5m	N15'W	65.8m	あり	あり

石室の規模は、8号墳が全長1.3m以上で奥壁の幅が約1m、9号墳は全長が5.2m以上で、玄室の長さが約3m、奥壁の幅は約1.8mであった。10号墳の横穴式石室は全長4.3m以上、玄室奥壁での幅が約1.5mであり、10号墳の石室規模が9号墳に近いことが明らかである。石室床面の中央に施される排水溝は、8号墳ではなく9・10号墳で確認されていることから、石室の規模と相関する要素として理解できる。9号墳では石棺の底石と短側石が出土しており、横穴式石室に組合せ式家形石棺1基が納められていたことが明らかとなった。石室の規模や排水溝の存在を考慮すれば、10号墳にも石棺が納められていた可能性がある。しかし、今回の調査では石棺材片は出土しておらず、9号墳の石棺直下に認められた砂利も10号墳では確認することができなかつたため、現段階で石棺の存在を断定することはできない。以上のことから、走田10号墳は8・9号墳と異なる支群に属すること、9号墳に比べてやや規模が劣るもの有力者が葬られた古墳であることなどが推察できる。

今回の調査地は直前まで竹藪として利用されており、竹藪の造成時には大規模な切り土が行われていた。また、調査前の表面観察では石材の露出や古墳時代遺物の散布など横穴式石室の存在を示す情報が全く得られていなかった。このような場所で横穴式石室が確認できたことは、状況によって横穴式石室の基底部が残存すること、石材の露出などが認められない場所でも横穴式石室が存在する可能性を示している。調査地の周辺、とくに調査地北側の竹藪には巨石露出地点が数カ所あり、今後の周辺調査によって未発見の古墳が多数確認されるものと期待できる。

注1) 中尾秀正「海印寺跡第2次調査概要」『長岡京市報告書』第32冊 1994年

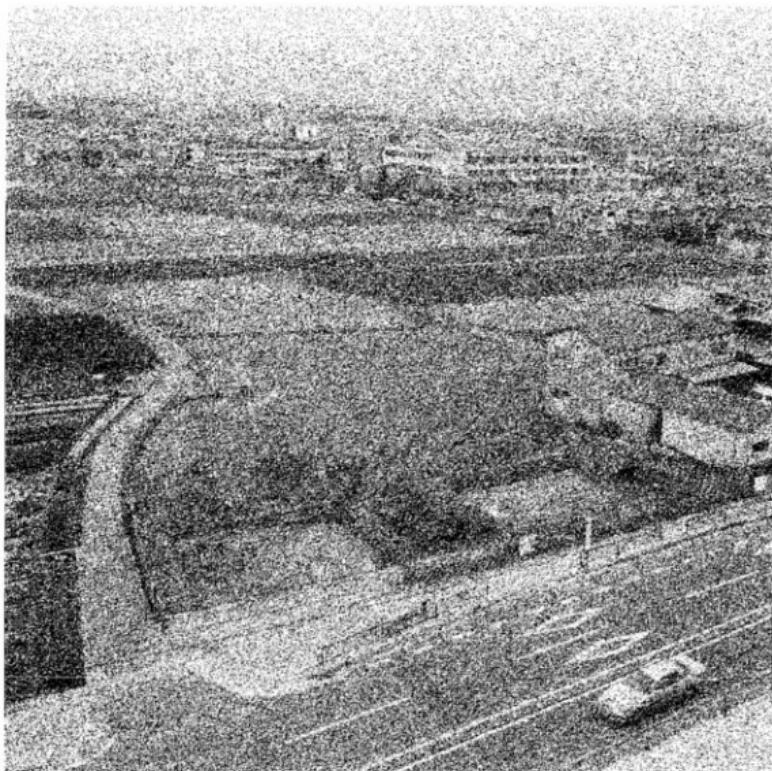
2) 山本輝雄「走田古墳群第1次・海印寺跡第3次調査概要」『長岡京市報告書』第36冊 1997年

3) 山本輝雄「走田古墳群」『長岡京市史』資料編一 1991年

付表6 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしへんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	長岡市文化財調査報告書							
副書名								
卷次	第39冊							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	岩崎 誠、木村 泰彦、原 秀樹、中尾 秀正、中島 皆夫							
編集機関	財團法人 長岡市埋蔵文化財センター							
発行機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒617-0826 京都府長岡市鶴田一丁目1番1号							
発行年月日	1999年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡(右京第582次)	長岡市今里庄ノ瀬32	26209	107	34度56分 2秒	135度41分 41秒	19971027	110m ²	住宅建設
今里車塚古墳			31			I		
今里遺跡			32			19971226		
長岡京跡(右京第604次)	長岡市長法寺北畠10-1他	26209	107	34度55分 57秒	135度40分 59秒	19980519	287m ²	住宅建設
長法寺七ツ塚古墳群			25			I		
長岡京跡(右京第626次)	長岡市井ノ内鏡山7他	26209	107	34度56分 18秒	135度40分 51秒	19981207	580m ²	造構確認
神足遺跡			107			I		
神足城跡	長岡市東神足二丁目7	26209	83	34度54分 59秒	135度42分 18秒	19990201	84m ²	遺跡確認
勝龍寺城跡			82			I		
走田古墳群	長岡市奥海印寺明神前31	26209	84-1	34度55分 23秒	135度40分 47秒	19990312	111m ²	墓地造成
海印寺跡			56			I		
走田古墳群	長岡市奥海印寺明神前31	26209	57	34度55分 23秒	135度40分 47秒	19971215	111m ²	墓地造成
海印寺跡			57			I		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項			
長岡京跡(右京第582次)	都城	長岡京期	周溝 溝 掘立柱建物	土師器、須恵器、墨書き器 埴輪、笠状木製品、下駄 側板	今里車塚古墳前方部北辺の外堤			
今里車塚古墳	古墳	古墳時代中期						
今里遺跡	集落	飛鳥時代						
		平安時代						
長岡京跡(右京第604次)	都城	長岡京期	七ツ塚2号墳周溝	土師器、須恵器	周溝を確認			
長法寺七ツ塚古墳群	古墳	古墳時代後期						
長岡京跡(右京第626次)	都城	長岡京期	溝	土師器、須恵器				
神足遺跡	集落	弥生、古墳時代						
神足城跡	城館	室町時代						
勝龍寺城跡	城館	室町、桃山時代						
走田古墳群	古墳	古墳時代後期	土壙、空塙		横穴式石室を確認			
海印寺跡	寺院							

図 版



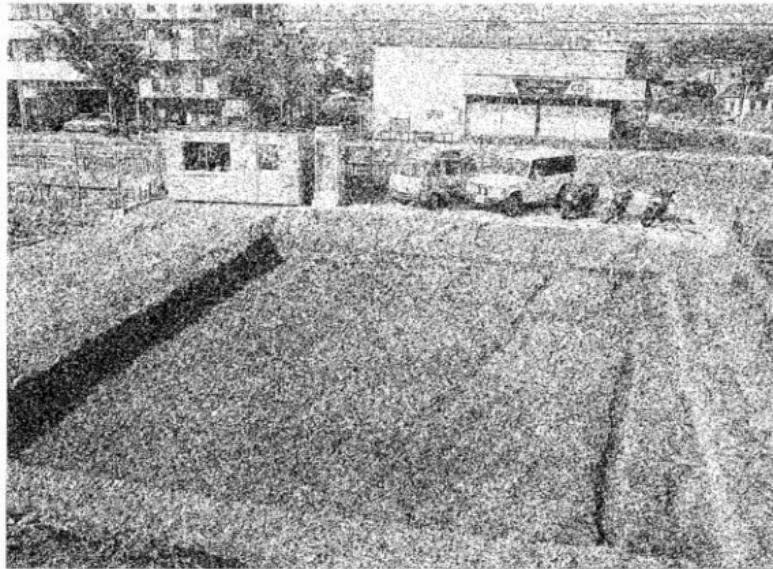
(1) 調査地全景（北西から）



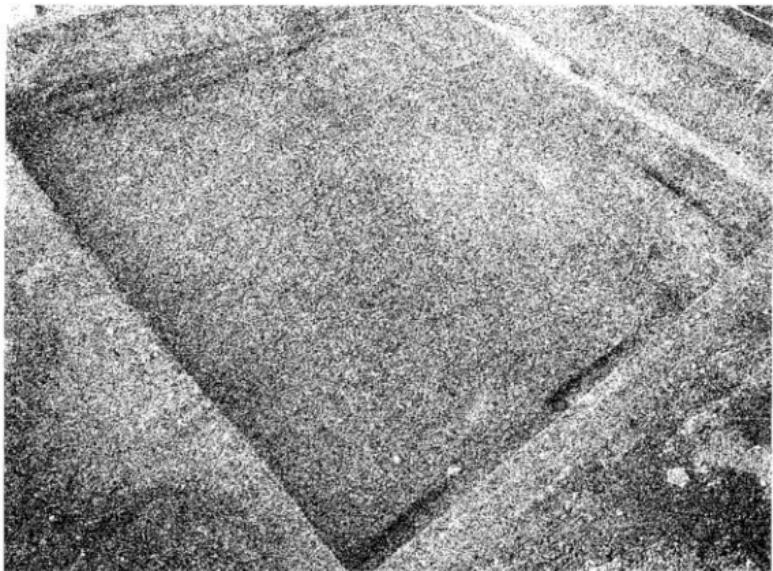
(2) 完掘状況全景（西から）

長岡京跡右京第582次調査

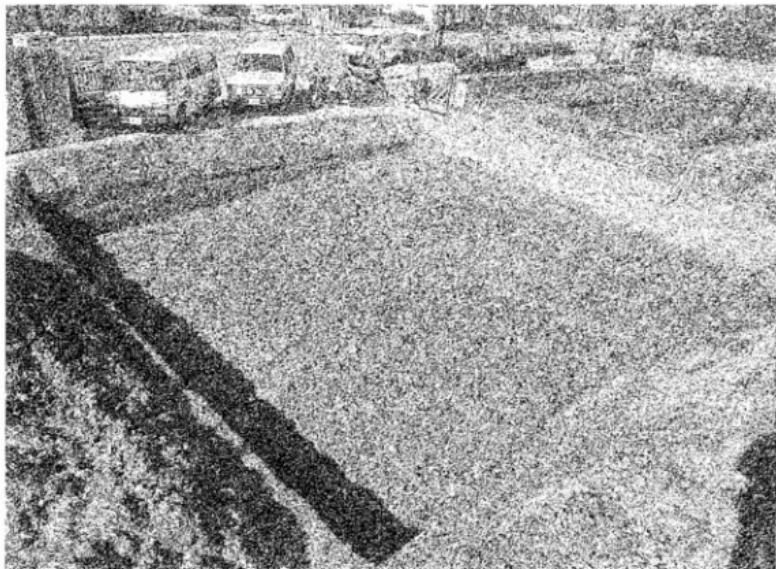
図版二



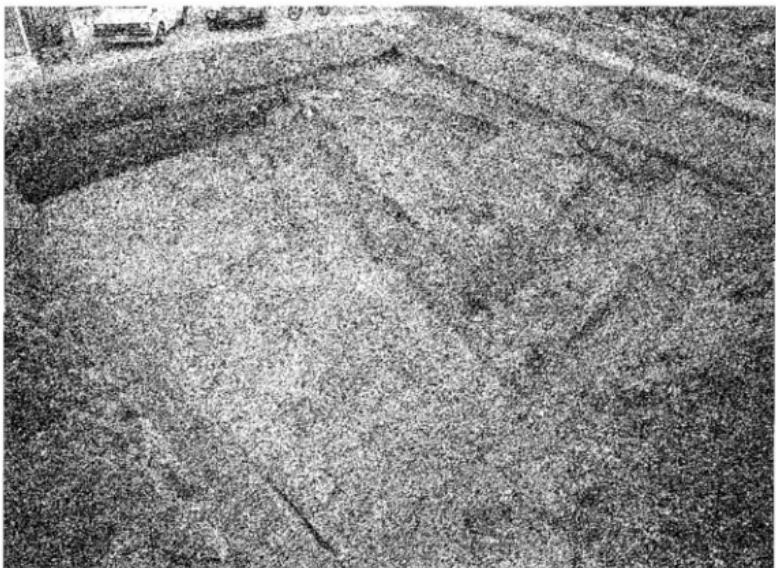
(1) 第2トレンチ検出の中・近世遺構（東から）



(2) 第2トレンチ検出の中・近世遺構全景（南東から）



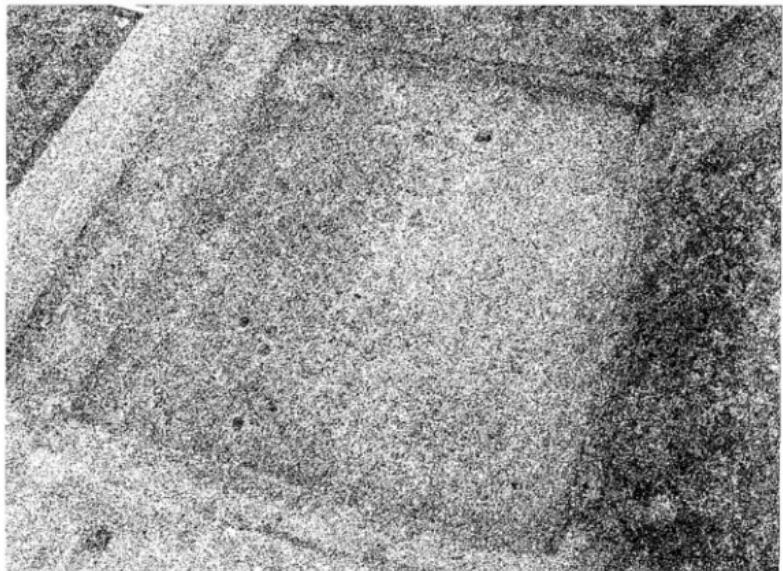
(1) 第2トレンチ検出の平安時代遺構全景（南東から）



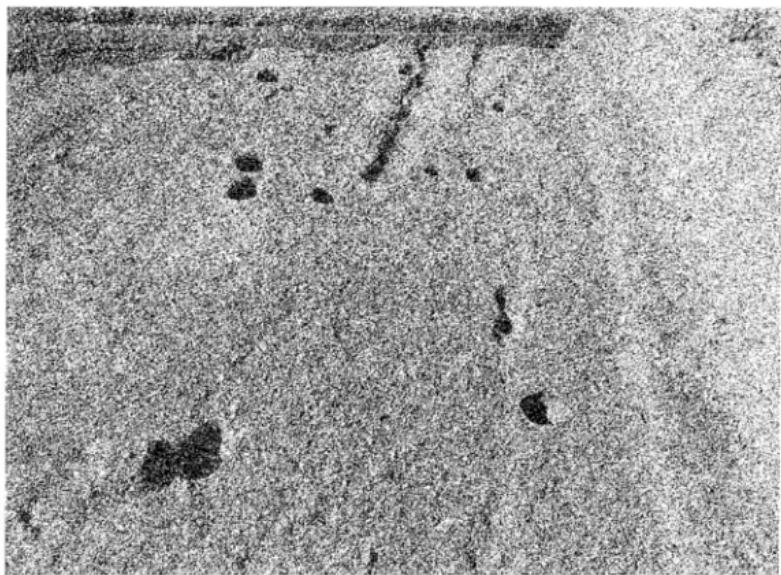
(2) 第2トレンチ検出の今里車塚古墳周濠（南東から）

長岡京跡右京第582次調査

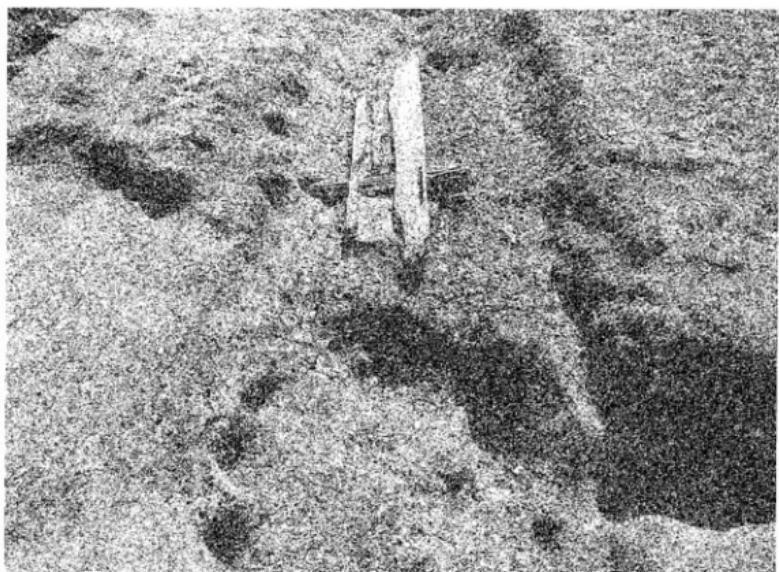
図版四



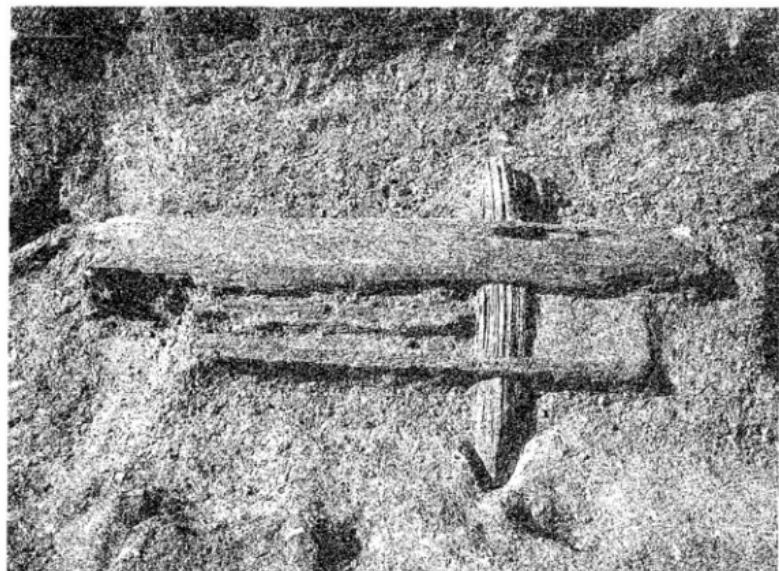
(1) 第2トレンチ完掘状況全景（南西から）



(2) 平安時代の掘立柱建物SB10（東から）



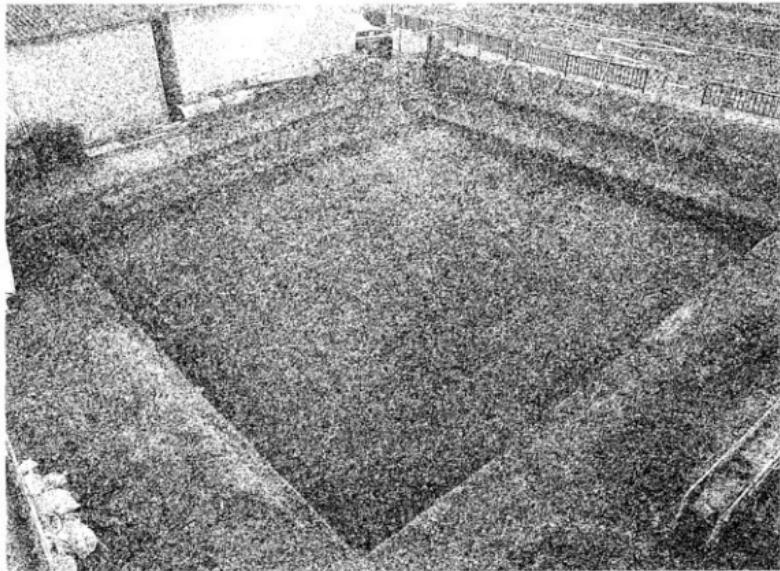
(1) 飛鳥時代の溝SD12（南から）



(2) 溝SD12の側板と杭検出状況（西から）

長岡京跡右京第582次調査

図版六



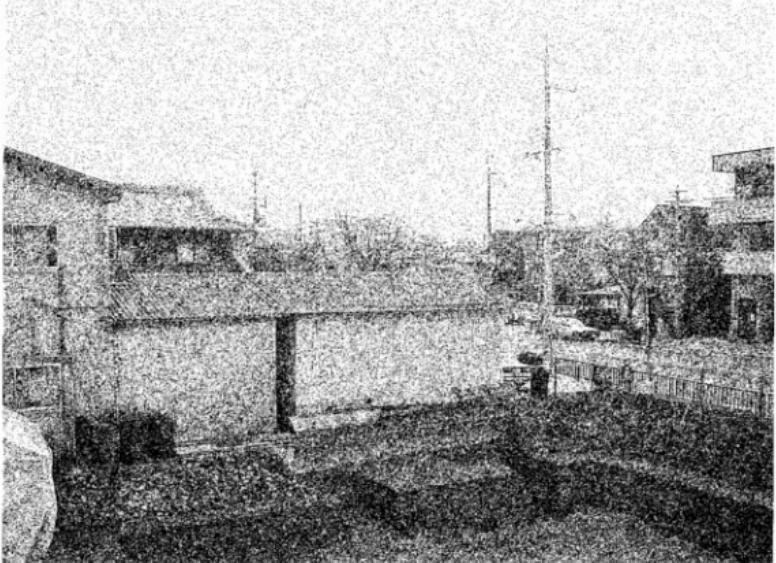
(1) 第1トレンチの中世面全景（北東から）



(2) 第1トレンチの平安時代面（北東から）



(1) 第1トレンチの今里車塚古墳前方部葺石崩落状況（東から）



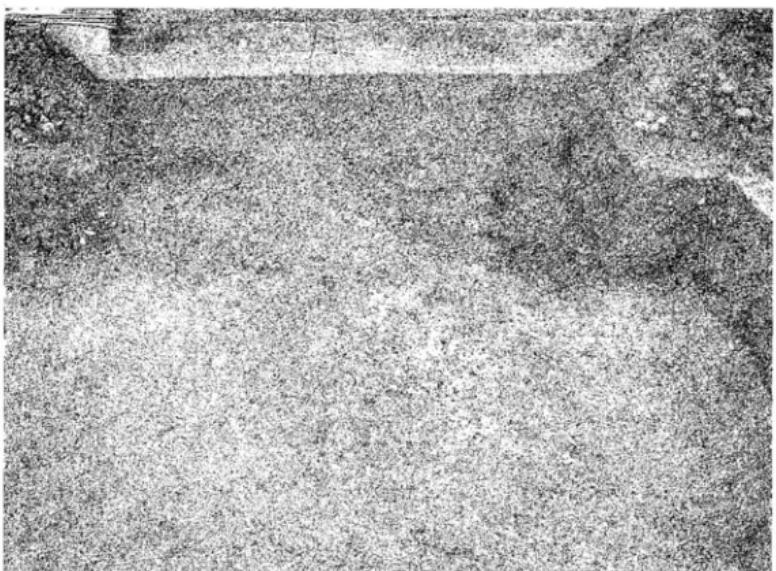
(2) 第1トレンチの今里車塚古墳前方部調査状況（北東から）

長岡京跡右京第582次調査

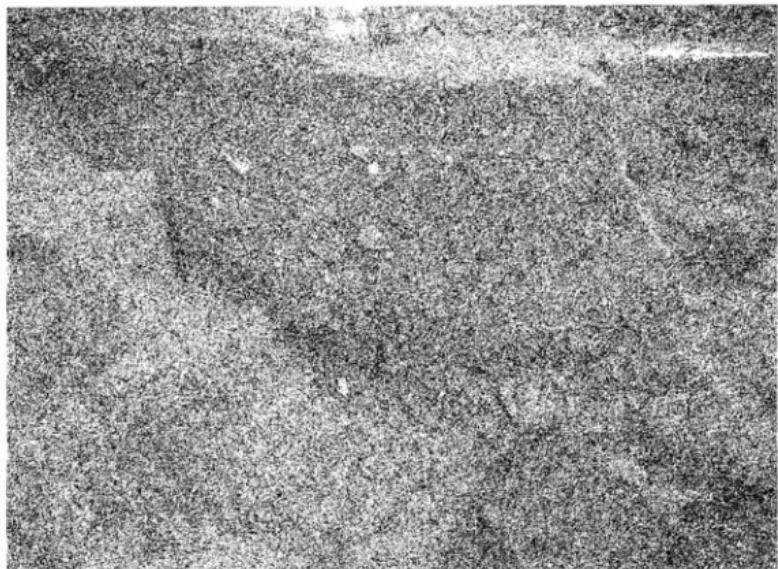
図版八



(1) 今里車塚古墳前方部封土検出状況（北西から）



(2) 今里車塚古墳前方部土層堆積状況（北から）



(1) 第1トレンチ南拡張部西断面（東から）



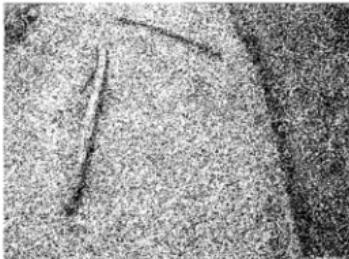
(2) 第1トレンチ南拡張部東断面（西から）

長岡京跡右京第582次調査

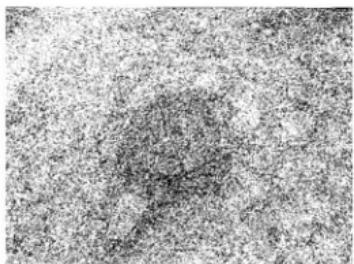
図版一〇



(1) 柱材出土状況（北から）



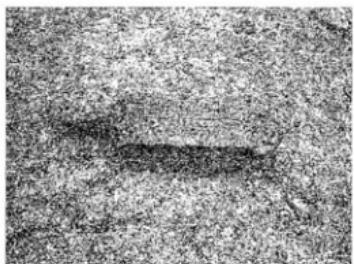
(2) 柱材出土状況（西から）



(3) 紡錘車状木製品出土状況（南東から）



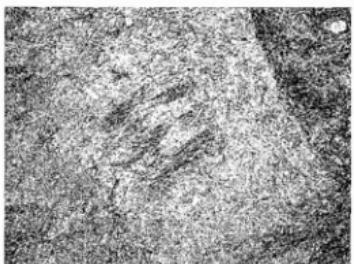
(4) 下駄出土状況（東から）



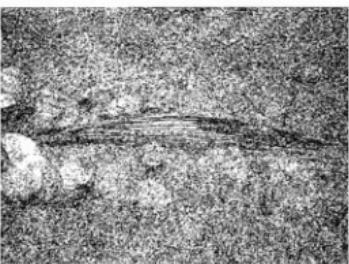
(5) 槽出土状況（北から）



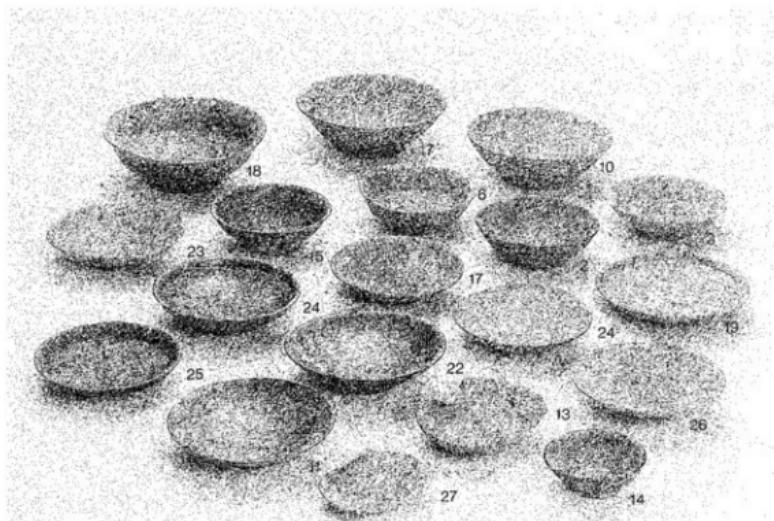
(6) 田下駄出土状況（北から）



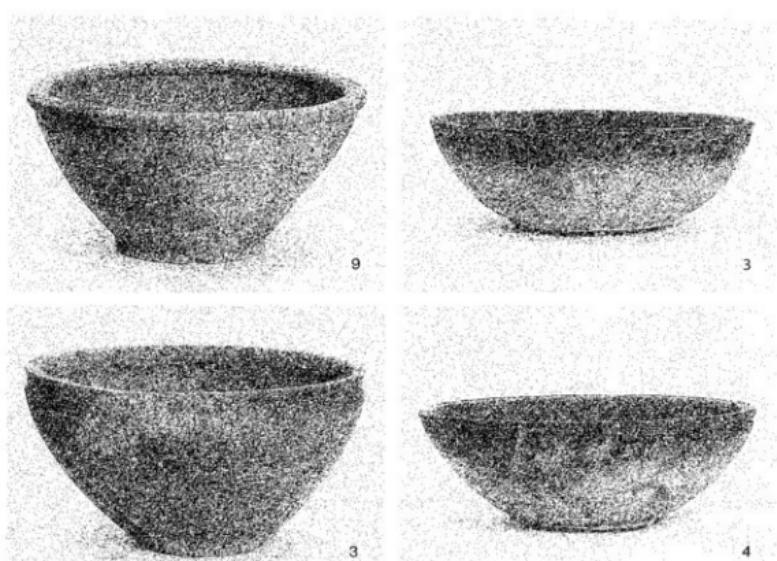
(7) 箕状木製品出土状況（北から）



(8) 柱材出土状況（北から）



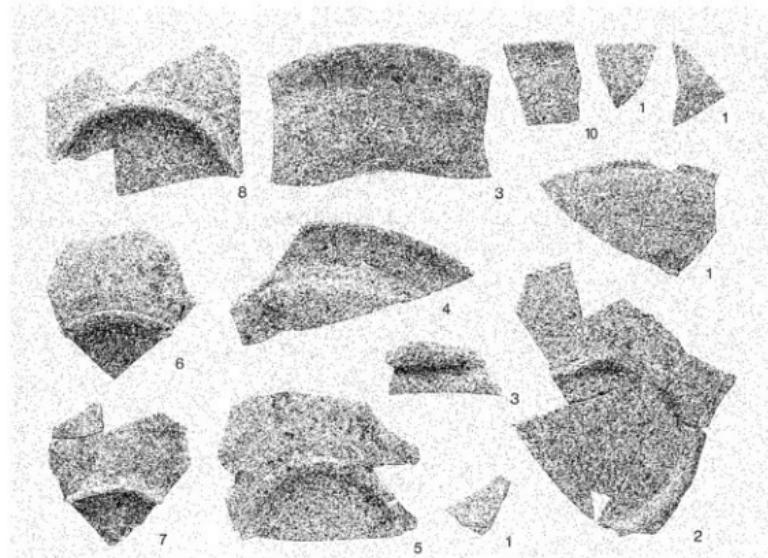
(1) 緑釉陶器と緑釉素地形態須恵器の椀皿類



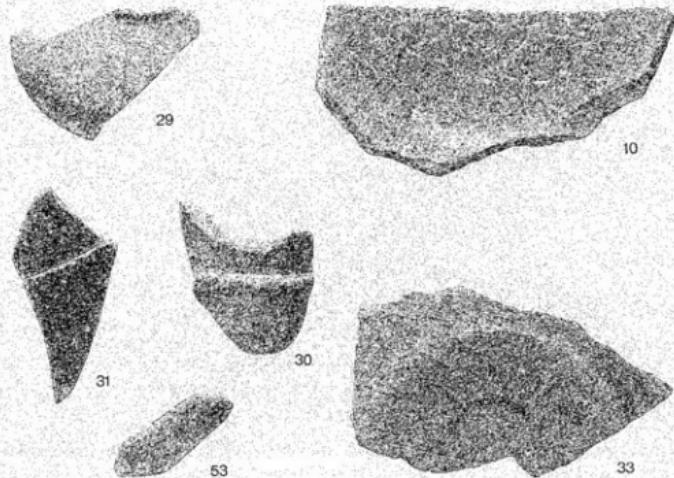
(2) 須恵器鉢・黒色土器椀

長岡京跡右京第582次調査

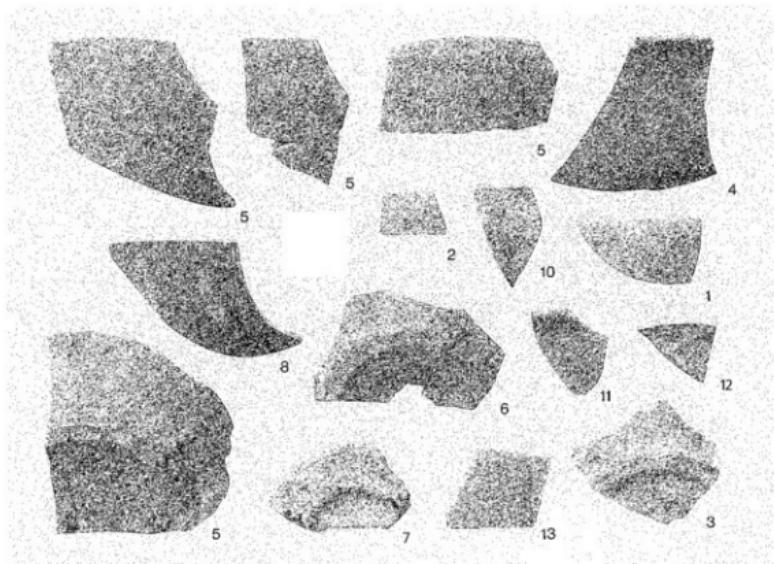
図版
一一



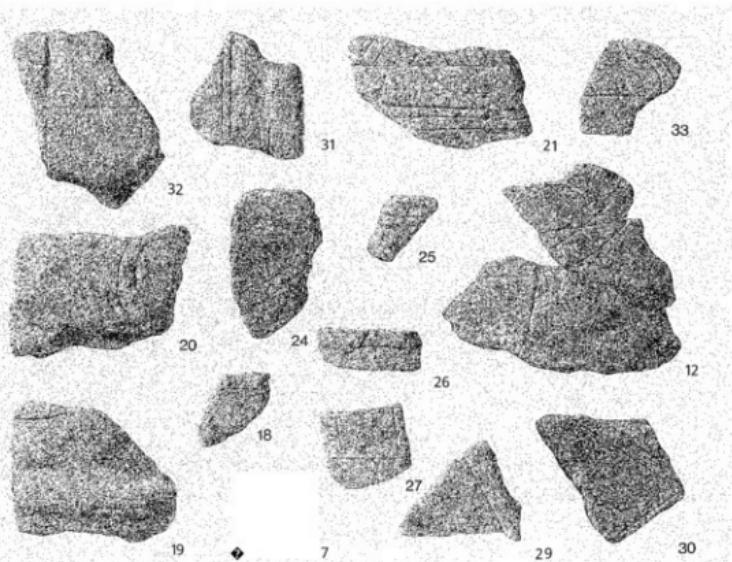
(1) 灰釉陶器の椀皿類



（2） 緑釉陶器の壺類と椀皿類陰刻花文・線刻記号



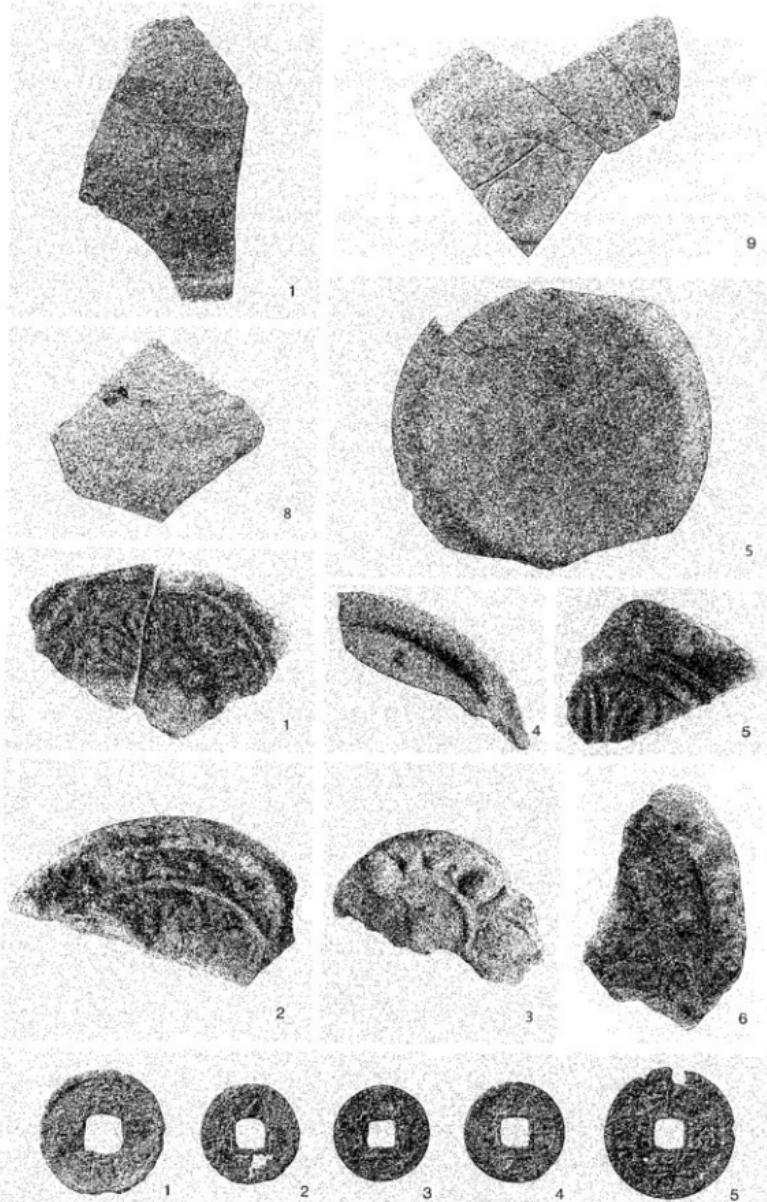
(1) 輸入磁器



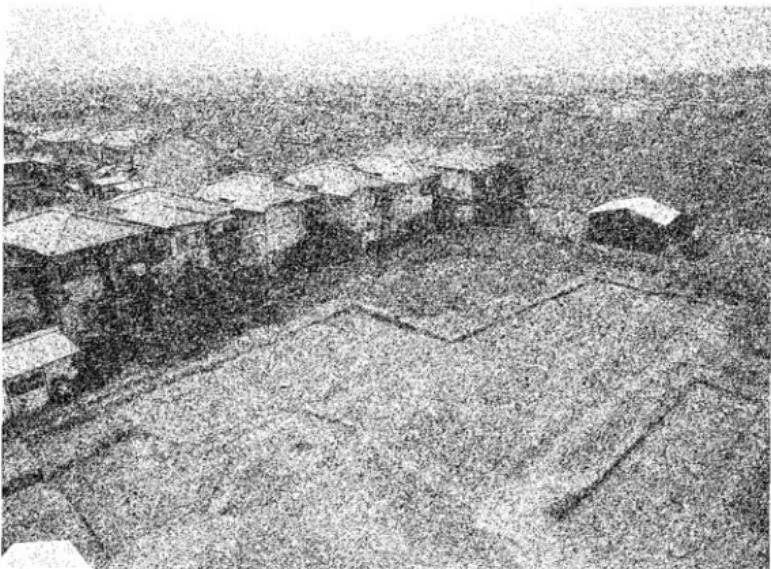
(2) 形象・線刻埴輪類

長岡京跡右京第582次調査

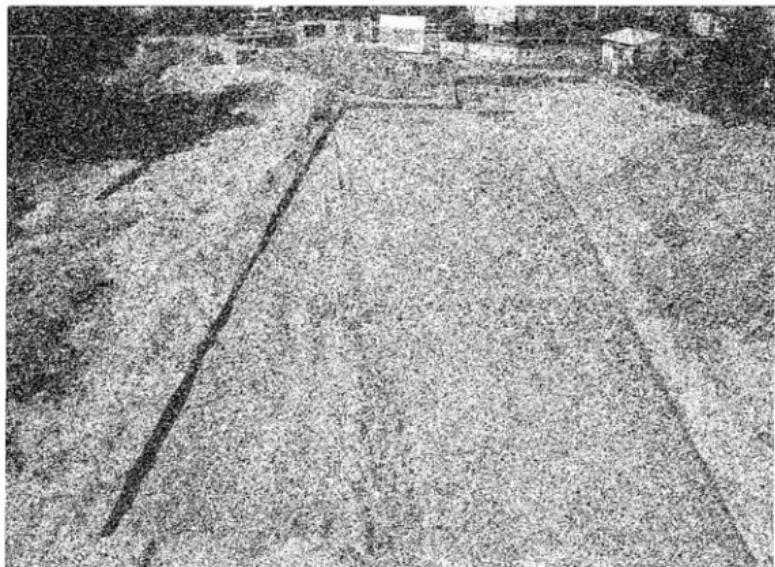
図版
一四



墨書土器・軒丸瓦・錢貨



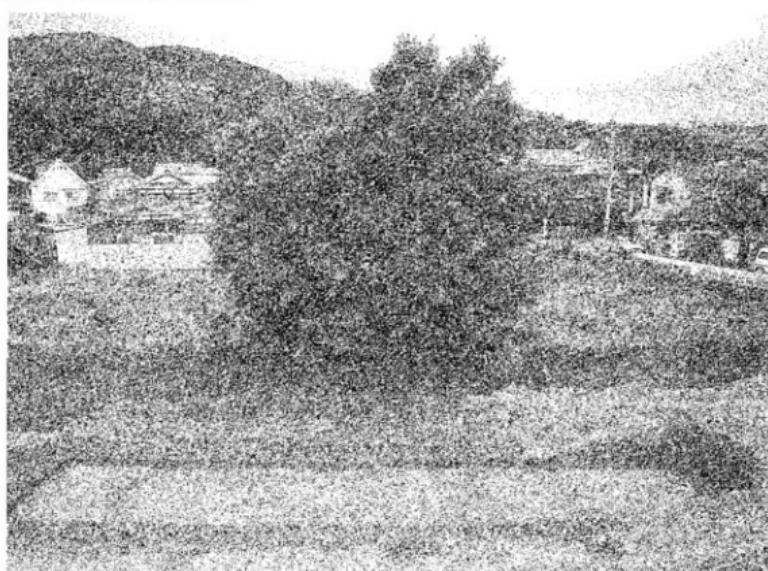
(1) 発掘調査地全景（北西から）



(2) 発掘調査地全景（南から）

長岡京跡右京第604次調査

図版一六



(1) 七ツ塚1号墳および第1トレンチ全景（東から）



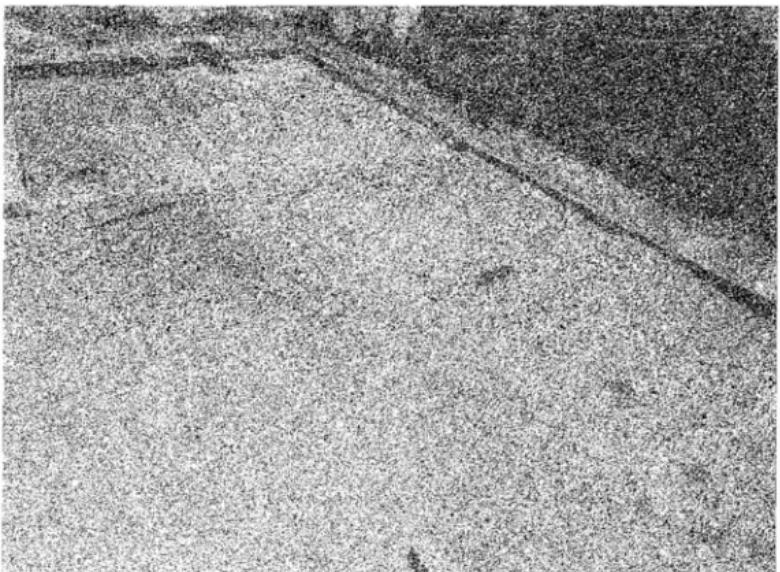
(2) 第1トレンチ全景（北から）



(3) 第1トレンチ全景（南から）



(1) 七ツ塚 2号墳および第2トレンチ全景（西から）



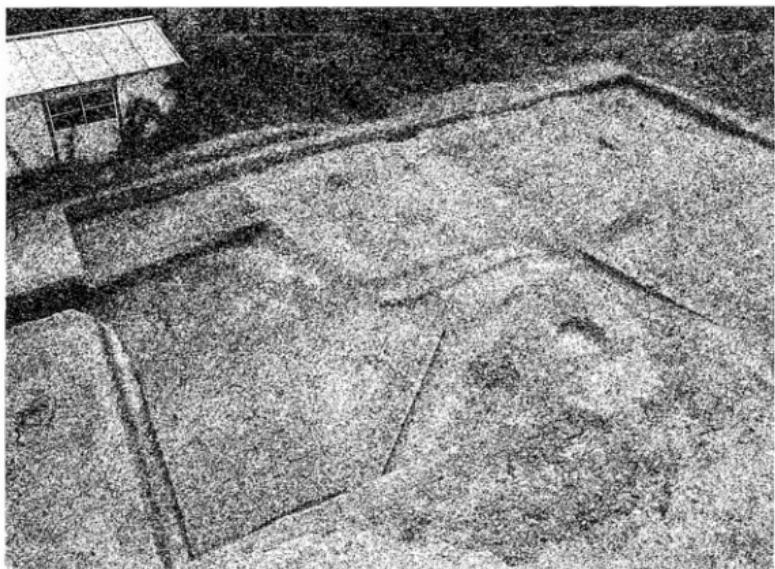
(2) 第2トレンチ全景（南西から）

長岡京跡右京第604次調査

図版一八



(1) 七ツ塚 2号墳周溝検出状況（南から）



(2) 七ツ塚 2号墳周溝検出状況（北西から）



(1) 七ツ塚 2号墳西側周溝（南から）



(2) 七ツ塚 2号墳北側周溝（南西から）

長岡京跡右京第604次調査

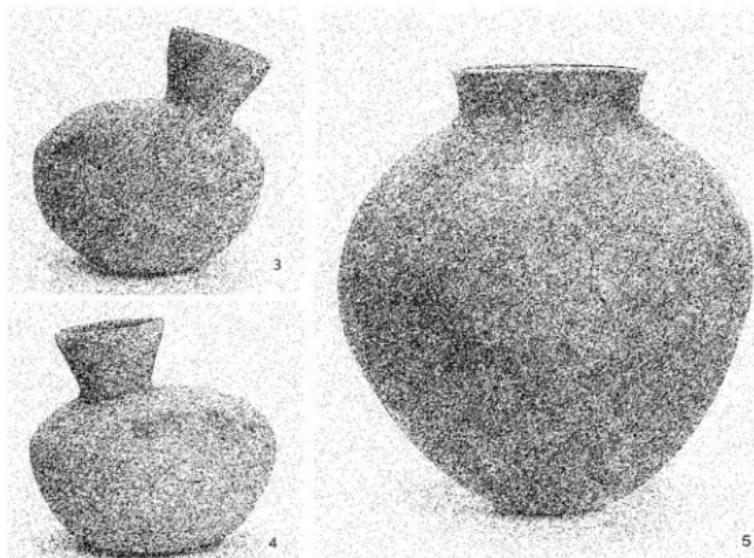
図版二〇



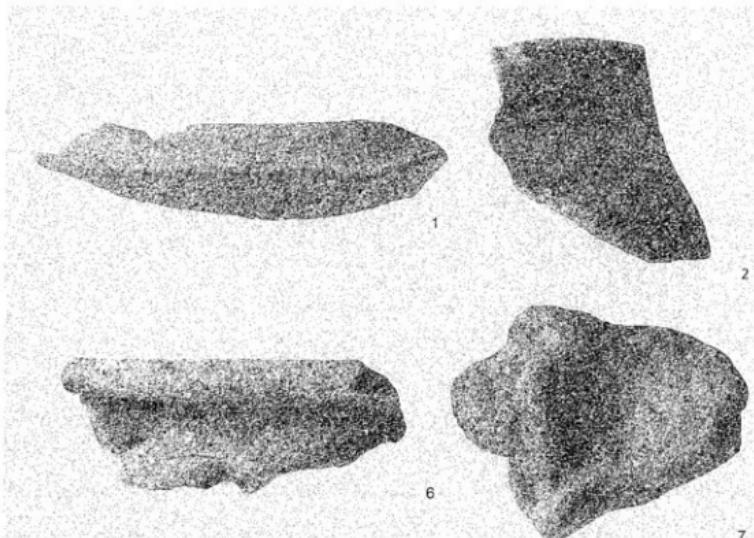
(1) 周溝内須恵器甕出土状況（南から）



(2) 第2トレンチ完掘状況（南西から）



(1) 七ツ塚 2号墳周溝出土遺物-1



(2) 七ツ塚 2号墳周溝出土遺物-2

走田古墳群第3次・海印寺跡第4次調査

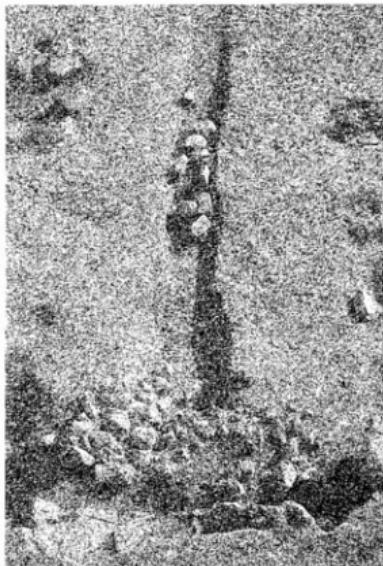
図版
二二



(1) 第1区全景（南東から）



(2) 走田10号墳全景（南から）



(3) 走田10号墳全景（北から）

長岡京市文化財調査報告書 第39冊

平成11年3月19日 印刷

平成11年3月31日 発行

- 編 集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1
電話 075-955-3622(代) FAX 075-951-0427
- 発 行 長岡京市教育委員会
〒617-0826 京都府長岡京市開田一丁目1番1号
電話 075-951-2121(代) FAX 075-951-8400
- 印 刷 菱電印刷株式会社
〒617-8550 京都府長岡京市馬場園所1
電話 075-955-7194 FAX 075-954-2617